
東方 亀兎忍

緑野ボタン 4号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方 亀兔忍

【Nコード】

N5878Z

【作者名】

緑野ボタン4号

【あらすじ】

メスの亀に転生しました。太古の幻想郷世界からスタートです。
(タグ補足：タイトルの設定をちょっと使っていますが、原作キヤラとかは出ません。ガールズラブの描写はギャグの範囲です)

1話「死後の世界」

人は死ぬと、どうなるのか。

肉体の話ではなく、精神はその後、どうなるのか。

有史以前から存在する疑問だろう。

現代日本に生を受け、冠婚葬祭のときくらいにしか信心を発揮しないなんちゃって仏教を崇拝する俺は、死後の世界なんてものに明確なビジョンなど持ち合わせていなかった。

しかし、実際に死んでみるとそうは言っていられない。

俺は交通事故に遭った。乗っていた通学バスが交差点で対向車の大型トラックとぶつかった。何が原因だったのか、今となっては確かめようがないが、起こったものをとやかく言っても仕方がない。俺が生きていれば文句の一つも言っただろう。だが、あいにく俺は死んだ。

事故の直後、大きな衝撃で体が吹き飛び、壁に叩きつけられ、それからの記憶があいまいだ。人間、不思議なものでぶつちぎりの恐怖体験に遭遇すると、妙に達観してしまうものなのか。そのときの俺は自分が死ぬことに根拠のない確信を持ち、その考えを冷静に受け止めていた。

そして、現在に至る。

「ぴー、ぴー！」

俺は気がつくと、真っ暗な場所にいた。えらく狭く苦しい場所だ。その窮屈さに耐えられず、必死に暴れていると、自分を取り囲んでいた壁が壊れた。

外から入ってくる光がまぶしい。目がよくみえない。まぶたが溶接されてしまったかのようにぴったりと閉じて開かない。体の様子

も何か変だ。まともに立つことができず、腹ばいになって前に進むことしかできない。とにかく、まずはここがどこなのか確かめなければならぬ。

「ぴー！」

幸い、耳はよく聞こえたが、ぴーぴー泣く声しか聞こえない。動物の鳴き声のような気がする。そのとき、盛大な地鳴りが起きた。何事かと驚いたが、そのおかげで目を開けることができた。光の痛さに耐えながら、ようやく周囲を確認する。

そこには、山があった。巨大な岩山だ。それだけならまだよかった。なんと、その山、動くのだ。さつきから響く地鳴りの音、それはこの山の足音だった。

これは何の冗談なのか。振り返ると、俺の後ろにはでっかい卵らしき物が何個もかたまっておいてあった。ほとんどの卵が割れて、中から人と同じサイズはあろうかという子ガメがわさわさ孵化している。そう、亀だ。あの甲羅を持った爬虫類のアレ。

さつきからぴーぴー鳴いている声はこいつらのものだった。それにしても馬鹿でかい。なんの怪獣映画だ。いや、でかいのはそれだけじゃない。俺の周囲に生えている植物。木だと思っていたらどうも違う。これは草だ。バナナの木は本当は草だと聞いたことがあるが、そういう種類ではない。どうみてもそこらへんの道に生えているような雑草が、何メートルもの高さまで育っている。あそこに見えるのはタンポポだろうか。黄色い花は小さい物でも座布団くらいのサイズである。

ここまでくればさすがに気づく。これは周囲の物が巨大化したのではない。俺が小さくなったのだ。信じられないがそう考えるより他にない。どうみてもこれは映画のセットとか、そういう次元に収まるものではなかった。

そして、なぜ小さくなったのかと言うと、それについてもだいた

いの推測はついている。いや、気づかないようにしていたと言っべきか。端的に言つと、俺は亀になっていた。子ガメである。俺の周りでぴーぴー鳴いている奴らと同類である。

「ぴいひいひいっ!？」

とりあえず叫んでみたが、当然人語は話せそうにない。

落ちついて考えてみよう。これは、仏教で言うところの輪廻転生というものではなからうか。魂は死後の世界で新たな生を受け、命は巡る。俺はあの事故で死に、そして次の生を受けてカメになった。しかし、自分で考えたものの、何とも信じがたい説である。

しかも、俺は前世の記憶をもったまま転生したことになる。これはどういふ仏の思し召しか。ヒトに転生できたならいざ知らず、よもやカメとは。カメに人間の心など不要ではないか。

そんなことを考えていると、地鳴りが止んだ。岩山と思っていた存在が動きを止めたのだ。そいつはカメだった。とんでもなくでかい。俺の体が小さいため、大きく見えると言うこともあるが、隣に生えている草の大きさから目算しても普通のカメの域を超えている。ゾウガメとかそういうレベルじゃない。軽自動車くらいの大きさはある。

そんな存在が現れたなら、普通の人間なら恐怖する。俺もその例にもれなかった。カメの本能がそうさせるのか、俺は自分の甲羅の中に引っ込んだ。そんなことをしたところかどうかは思えないが、関係なかった。とにかく怖い。

しばらくそうしていると、落ちついてきた。俺が何かされる気配はない。恐る恐る顔を外に出す。

巨大ガメが俺をガン見していた。

慌てて甲羅に引っ籠る。

『でーてーこーいー』

「ぴっ!？」

今、声が聞こえた。間延びして聞き取りにくい声だったが、確かに意味をもった言葉だ。それも、頭の中に直接響いてくるような、不思議な声だった。これは、巨大ガメの言葉だろうか。とすると、カメ語？ そんなものが動物の世界にあったとは。

『なーんーでーかーくーれーるー？ おーかーあーさーんーだーよー？』

どうやら、この巨大ガメ、俺の母親のようだ。

1話「死後の世界」(後書き)

ウワアアア!

まだ前の作品を完結させてないのに新作を投稿してしまったあああ!

……まあ、誰も見てないだろうけどね……(泣

2話「あつという間に時は過ぎ」

それから俺のカメとして生活が始まった。

はつきり言って、過酷だった。自然界は厳しい。生まれたての赤ちゃんなど、他の動物にとってかっこうの獲物である。常に捕食の危険にさらされているのだ。子ガメたちは、親ガメの足の下にずっと隠れていなければならぬ。

幸いにもうちのビッグマザーは、この付近の生態系の中でも上位にいるらしく、天敵と呼べる生き物はいないようだった。名前があるようで、迂木というそうだ。母ちゃんが腰を据えている内は安全である。その甲羅の下に潜んでいれば敵に襲われる心配はない。

しかし、ずっとその場にとどまっていることはできない。エサを確保する必要がある。カメの生態について詳しくはないが、爬虫類だから授乳はしないのだろうな。どうやら、俺たちは雑食のようだ。大人になると草を食べて生きていけるようだが、子どものうちは肉しか食べられないらしい。迂木は子ガメたちのために狩りをする。

意外なことに動きの遅い迂木にも狩りはできた。しかし、その方法が常軌を逸している。あるとき、水場に集まっていた野ウサギ目がけて口から光弾を発射したのだ。まさに怪獣である。なんでも、妖力という不思議エナジーを使っているらしい。うちの母親は妖怪だった。前からおかしいと思っていたが、どうもこの世界は俺が昔いた世界とは違うのかもしれない。

ただ、相手も俊敏な野生動物である。そういった狩りはほとんど失敗に終わった。とにかく、迂木は動きが緩慢なのだ。それに、光弾は発射されれば一直線にターゲットに向かって飛んでいくが、禍々しい妖気の気配があふれ出すので、危険を感じ取った動物たちはたちどころに逃げてしまう。

なので、俺たちが動物の肉を食う機会と言えば、運よく漁られて

いない死体を見つけたときくらいのものだ。いつもは虫を捕まえて食べる。地面に埋まっているイモムシなどを食べることが多い。迂木が妖気をこめて足をふみならずと、びっくりして地表に出てくるのだ。アリの巣なんかも狙い目である。

ただ、こうして今では死体だの虫だのと平然と語れるが、最初はやはり相当の抵抗があった。現代日本で暮らしていた俺にとって、そんなゲテモノを食べるなんて無理だと思った。しかし、食わなければ飢えて死ぬ。まともにエサが取れない時期だってあるのだ。いつも十分にすべての子ガメにエサが行きわたるわけではない。子ガメたちもそれがわかっていているから、他の奴らを押しつけてでもエサを独占しようとする。遠慮していたのは最初だけだった。バーゲンに群がる主婦がごとく、俺はエサをむさぼった。

俺はエサを独占するようなことはなく、収穫が少ないときは最低限自分に必要な分だけを食べたが、他のカメはそうではない。弱い子ガメは衰弱し、力尽きていった。それに、移動中はどうしても他の動物に狙われる危険が高い。迂木は必死に俺たちを守ってくれるのだが、いかんせん動きがトロすぎる。さっと飛び出してきた狐に啜えられていった子ガメが何匹もいた。一瞬の隙について空から飛びかかってきた猛禽類に連れ去られた子ガメも何匹もいた。

『くーそー！ まーてー！』

迂木は子ガメたちに愛情を注ぎ、死んでしまったり食べられたりしたときは怒り、悲しんでくれる。が、それはごく短い間だけだ。

『まー、いーやー』

思うに、迂木はアホなのだ。一応、人間に近い感情らしきものはあるが、基本的に動物の本能に忠実に生きている。俺たちの種は多産型である。子を多く残して、次世代に命をつなぐ。子が多く死に、

わずかな生き残りしか大人になれないことは始めからわかっているのだ。迂木は例外的に長生きだったので妖怪化したようだが、もともとそう強い種というわけではないようだ。俺も長生きできれば妖怪化するのだろうか。いや、こつやつて人間の記憶をもっている時点ですでに妖怪のような気もするが。

ところで、俺は雌ガメとして生まれてしまったようだ。ただ、雄とか雌とか以前にカメだしな。確率二分の一の結果だ。いまさらどうしようもないことである。

迂木は二百年くらい生きているらしい。たまに俺らと同種のカメと会うのだが、どのカメよりも巨大だ。長く生きれば生きるほど、体内の妖力が成長して強い妖怪になれるという。他の雌カメは、一度の子育てで最後まで育て上げることができるとは数はいたい一匹か、2匹といったところである。迂木はさすが妖怪、優秀であり、今のところ俺を含めて7匹の子ガメが残っている。

『カーシーカーシーのー』

迂木は俺のことを『かしこいの』と呼ぶ。まだ、名前をつけられてはいない。他の子ガメたちも『ちつこいの』とか『すすべの』としか呼ばれない。

この迂木の言葉は“念話”という妖術らしい。テレパシーみたいなものだ。実際にしゃべっているわけではない。どういうわけか、俺は念話を使える。普通は妖怪化するくらい長生きしないと使えないそうだ。しかし、たまに生まれつき知能が高い突然変異のような固体がいるらしく、それかもしれないと言われた。迂木とは辛うじてコミュニケーションがとれるが、兄弟子ガメはまったく反応してくれない。

そうそう、能力と言えば、どうも俺には特別な能力があるようなのだ。それは『程度の能力』と呼ばれている。これは、妖怪であるとかそういうことは関係なしに、先天的にもつ裏ワザ的なチカラだ

という。実は迂木も『身を守る程度の能力』というものを持っている。そのおかげで長生きできたそうだ。

『程度の能力』を持つ者は、自ずとその効果と使い方を知る。俺の持つ能力は『注目を集める程度の能力』である。まじで使えない。以前俺が生きていた世界でなら使い道があったかもしれないが、今の俺はただのカメ。いたずらに注意を惹くようなことをすれば肉食動物の餌食になってしまう。

そんな殺伐とした野生ライフを送っていた俺は、ある日、ついに迂木から名前をもらった。

『かーしーこーいーのー。おーまーえーのーなーはー……』

葉裏。葉っぱの裏と書いてヨウリと読む。俺の甲羅の色が濃い緑色だったのでそう名付けられた。日の光を浴びる明るい表側の色ではなく、暗くどんよりとした深い緑だったので葉裏である。

他の子ガメたちも立派な名前をもらった。意味を理解できていないようだが。カメ社会に名前なんて不要である。迂木は妖怪として知能を持っていたために、自分の子ガメたちに名前を与えるということをしてみたようだ。俺以外の兄弟たちはなんのことかわかっていない様子である。

迂木はアホなりに一生懸命名前を考えてくれたようなので、俺もこの名前を大切にしたいと思う。

『じゃー、きょーかーらー、ひーとーりーだーちーしーてーねー』

え、なんですか？

3話「沢の巨木」

俺の体長は15センチくらいになっただろうか。ミドリガメくらいの大きさである。どうやら、カメ社会ではこのサイズになると独り立ちする決まりらしい。

マイビッグマザーからの突然の宣告に、茫然とする俺。兄弟たちは歩み去っていく迂木をピーピー鳴きながら追いかけた。向こうもカメだがこちらもカメ。両者ともに足が遅いが、圧倒的な歩幅の違いで迂木は森の奥へと消えていった。

それからの俺たちは死に物狂いだっただ。日々、外敵から襲われる恐怖におびえて暮らした。カメ並みの脳みそしかもたない兄弟たちがうらやましい。俺は下手に人間の感性を持つせい、毎日がハツピーバーステイ気分だよ。

のろまなカメが群れていたのでは敵の目につきすぎてしまう。俺たちは散り散りに別れた。それが、俺たち兄弟の別れだった。その後どうなったのかはわからない。

俺は森の中を少しずつ移動していった。いつもハラヘリ状態だった。改めてマイビッグマザーの偉大さがわかる。この体では虫一匹捕まえることも困難だ。草をたべたべ飢えをしのいだ。

そして、ある日転機は訪れた。

鷹に強襲されたのだ。見つかったと思ったときにはもう遅い。俺は慌てて甲羅に引っ込む。鷹は俺を捕まえると空高く飛び上がった。

(まずい！ 死ぬうっ！)

俺の自慢は甲羅のかたさだ。クチバシで突かれたくらいじゃ壊れない。しかし、鷹もそれをわかっている。迂木に教えてもらったことがある。上空から捕えたカメをわざと落っこし、地面に叩きつ

けて甲羅を粉碎するのだと。そんなことされたら死んじゃうつてば。絶体絶命のピンチ。容赦なく鷹は爪を放した。重力の赴くまま自由落下の恐怖を堪能する俺。これまでの人生、いやカメ生が走馬灯のように脳裏をよぎった。俺はまた死ぬのか。願わくは天寿をまっとうしたかった。

俺が次の転生先はどうか人間でありますようにと祈っていると、甲羅に走る衝撃。だが、それはかたい岩場の感触ではなかった。ごぼごぼと体が沈んでいく。水だ。俺を捕まえた鷹はドジっ娘属性でも有していたのか、うっかり俺を水場に落としてしまったようである。

(ふう……なんとか助かった)

それにしてもここの水はきれいだな。森の奥深く、河川の上流域にまで来てしまったようだ。澄み切った美しい沢の中心に、天を突くような巨木が一本、立っていた。

この木はただの木ではないと、直感が告げていた。大きな力を感じる。しかし、それと同時に弱っていることがわかる。木は枯れかけていたのだ。病気だろうか。これほどの大きな木となると、何千年という樹齢があるかもしれない。

『だれ……か……たすけ……』

そのとき、念話が聞こえたような気がした。いや、間違いなく聞こえた。その声はなんと目の前の巨木から聞こえてくる。この木が助けを求めているのだろうか。もしかすると、この木は妖怪なのか長生きすると妖怪になるのなら、植物にだって当てはまらないとは言えないだろう。

(どうしたんだー！)

俺は念話で話しかけてみたが、答えがない。こちらに気づいていないようだ。俺が小さすぎて感じ取れないのかもしれない。そうだ。こんなときこそ俺の能力『注目を集める程度の能力』を発揮すべきときだ。

俺は能力を使いながら再度呼びかけてみた。

『あな、たは……？』

今度はこちらに気づいたようである。

『ちいさきものよ……わたしは、やまいにおかされた……もうじき、しぬでしょう』

この妖怪は迂木よりも頭がよさそうである。俺の予想通り、病気のようだ。枯れている部分は幹の深くまで浸食しており、もう助かる見込みはないとのこと。

『しかし、いちまんねんをいきつづけた、そのあかしをのこしたい……わたしの、ちから、を、あな、た、に……』

そう言うと、木は生気を失った。なんとなくだが、わかる。この木は死んだのだ。依然としてその姿は壮観なものだが、すでに亡骸となった。そして、遙か高みにある枝から一つの実が落ちてきた。ちょうど俺の前で止まるようにしてころころと転がってくる。

その実は琥珀色に光っていた。文字通り、輝いているのだ。圧倒的な妖力を感じる。極限まで練り上げられた妖力の渦がクルミほどの大きさの実の中に閉じ込められている。これは、この木の力のすべてが詰まった物だ。一万年分の成長した妖力が余すところなく凝縮されている。

え、これって、ものすげー、タナボタじゃね？

(木さん、ありがとう！ キミの死は無駄にはしない！ パクツ
……うめええええ！)

というわけで、おいしくいただいた。前世も含めて、今まで食べてきた物すべてを超えるほどのおいしさだった。あつという間に果汁の一滴も残さずに完食した。

その直後だ。俺の体の中にとんでもない量の妖力がみなぎってきた。この力さえあれば、もう何も怖くない。捕食者の存在に怯える必要もなくなる。これで俺も妖怪に……あれ？ なんだか、体の調子がおかしい。手足が動かない。どうなってるんだ。

『あは、あはははは、あはははははっ！ ばかね、わたしのちからが、ただでてにはいるとおもったの？ もう、あのからだは、つかえなくなってしまった。こんどは、あなたをなえどこにして、せいちようするわ』

(ナニイイイ!?)

ですよ。そんなうまい話、あるわけないか。

どうやら、病気で死にそうになった巨木さんは、自分の体を捨てて新しい種を俺の体に仕込んだらしい。莫大な妖力の影響によって、種は俺の体の中で急成長を始める。

(いたい、いたい、いたいイイイ!)

体中に激痛が走る。俺の腹の中で異物が大きくなっていく。根が内臓に食い込み、四肢の末端まで浸食される。普通ならとつくに死んでいるだろう。だが、俺は死ぬことも許されず、終わらない激痛

に苦しみ続ける。俺の体内に張り巡らされた根っこは完全に根付き、俺は全身を支配されてしまった。

それが終わると、次は“芽吹き”が始まる。腹の種が膨れ上がる。やばい。今度こそ死ぬ。ミシミシと音を立てて俺の自慢の甲羅が悲鳴をあげる。

(いぎやああ、ああ、あがあああっ！)

『あはは、あはははっ！ わたしのえいようになってね』

ついに俺の甲羅は砕けた。内側から押し上げてきた種の芽が、俺の背中から飛び出す。逆に腹側からは根っこが飛び出し、地面の奥深くへと伸びていく。そして、俺の意識は静かに暗転していった。

4話「目覚め」

『タスケテ！ タスケテ！』

だれかの声がある。この声はどこかで聞いたことがある。

さて、俺はだれだったっけ。そうそう、葉裏だ。

俺が見た最後の記憶。できれば思い出したくないほどグロテスクな死に様だった。ということは、俺はまた転生したのだろうか。そういうえば、この声は何だ？ 脳内に響いてくる。

『タスケテ！』

(だれだよ、あんた。俺は眠いんだ)

ここは暗い。体も動かない。意識だけが鮮明だ。そして、俺の体の中に熱い何かが流れ込んでくる。そこで気がついた。熱い。体が焼けるように熱い。

(あちっ、あちちち！ なんだ、なにが起こってるんだ？)

俺の目が覚めたのも、この熱さのせいだ。血管に溶けた鉄を流し込まれているような感覚である。もうこんな拷問はたくさんだ。確かに俺は前世で徳を積むようなことはしなかったが、こんなひどい目に遭わされるような業も積んだ覚えはない。

『ニンゲンガクル！ コロサレル！』

この声、どこかで聞いたことがあると思ったら、俺に寄生しやが

った巨木妖怪じゃないか。俺はまだ生きているのか？

俺は自分の意識を集中させる。ここは、俺の体だ。体中に木の根が張り巡らされている。なんだか、成長しているような気がするな。俺は寄生されながらも生きていた。いや、巨木に生かされていたのか？

俺の背中からは幹が生えている。意識は俺の体を離れて、そこをずっと上に登っていくことができた。今の俺はヤドリギと一心同体になっているのだろう。現在のヤドリギは、俺が最初に見たときの姿よりもずっと立派に育っていた。あれからどのくらいの年月が経ったんだ？

「ようやくたどり着いた。これが噂に名高いあの『見られずの霊樹・六島苞』か……」

「ああ、周辺の森に張ってあった結界は厄介だったが、なんとかなってよかったぜ。見るよ、この大きさ、超一級品だ。こいつは金になるぜ」

ふと、幹の下あたりに意識をやると、人間がいた。久しぶりに会ってみた方がいいが、なんか悪人臭がするな。素直に喜べない。どうやら、この木を切り倒すつまりらしい。なるほど、それで巨木妖怪の奴は慌てているのか。

六島苞なんてかっこいい名前と呼ばれているようだけど。結界とか張って人間対策はしていたようだが、破られたみたいだ。ざまあ、と言ってやるう。さっさと切り倒されるがいい。

それで、六島苞の奴はさっきから何をしているんだ？

『コノカラダハ、モウダメダヨ！ タネヲノコサナイト！』

この体はもうダメだ。種を残さないと……って、こいつもかし

て！？

俺は自分の体に意識をもどした。案の定だ。こいつは、自分の持つすべての妖力を俺の体に集めている。あのと一緒だ。樹木という体を捨て、すべてを果実に結集させて逃げようとしているのだ。体が熱かったのは、妖力を流し込まれていたせいだ。

（おい、こら！ 人の体に何してんだ！？ 俺は芋じゃねえぞ！）

『ジヤマシナイデ！ “ミ”ハ、デキタ。アトハ、“タネ”ヨイレルダケ……』

実はできた、後は種を入れるだけ、ってどういうことだ？

そのとき、幹の上部に俺の意識が違和感を感じ取った。今度は何だ。意識を向けると、そこにコブのような物ができていた。それが、だんだんと根元に向かって降りてくる。

よく調べてみると、それはなんと六島苞の命の結晶だった。そうか、これが種なんだ。実は果肉と種でできている。果肉には妖力がこめられており、種には六島苞自信の魂が宿っている。果肉の妖力を養分にして六島苞は成長するのだ。実を食べる者は、言うなれば土壌。そこに果肉の養分を振りまき、最上の苗床を作り出す。

前の六島苞と比べて、今は格段に妖力が上がっているのがわかる。そのあまりにも膨大な妖力は、枝に実らせることができないほど強大なため、地下に存在する俺の体を芋代わりにして妖力を蓄えていたらしい。あくどい。

つまり、種である“コブ”が俺の体に到達してしまえば、“実”が完成することになる。それだけはやめさせなければならぬ。っーか、やめろ！

（とまれー！）

『ワッセ！ ワッセ！』

だが、俺は無力だった。俺と六島苞とでは、生命としての格が違うようである。俺の意識と違って、六島苞の意識は“コブ”という形で実体化している。現に幹の中を移動しているコブを、実体のない意識の集まりでしかない俺が止めることはできない。俺自身の体もいまや六島苞の根っこに絡みとられて支配されてしまっている。抵抗はできない。

残す可能性として、実体のある連中に止めてもらおうしか他に道はない。つまり、人間たちに木を切り倒してもらおうのだ。種は幹の中をゆっくりと下降している。根にたどりつく前に切り離してしまえば俺の勝ちだ。

『人間たちよ！ 俺の声を聞けい！』

「な、なんだこの声は！？」

俺は念話を通じないか試してみた。うまくいったようだ。人間たちは動揺している。

『俺の結界を破ったことは褒めてやろう。だが！ お前たちの思い通りにはならんぞ！』

「もしかして、六島苞がしゃべってるのか？」

「これは妖怪が使う念話という術だ。なるほど、こいつにも自我というものがあるようだ」

よし、次は俺の能力を使って、注目を集める。俺と六島苞は一心同体。つまりは、俺の能力の適用範囲に六島苞もいることになる。

俺は六島苞の魂が宿る結晶に“注目を集めた”。

「ん？　なあ、何か感じないか？」

「お前もか？　そうだな、存在感、とでも言えばいいのか……あのあたりに強い気配を感じる」

「おお！　オレもそう思ってたんだ！」

「私は靈感があまり強くないのだが、それでも感じ取れるほどの大きな存在だ。幹の中に何かいるのか？　ん？　しかも、幹の中をゆっくりと……下に向かって移動していないか！？」

ここまでくれば、後は俺の演技次第だ。頼むから、早く伐採してくれよ！

『な、何を言っているのだ！　下等な人間風情が！　俺は何も隠してなどいないぞ！』

「なんだ、こいつ動揺し始めたな。はーん、そうか、わかったぞ」

「なにがわかったんだ？」

「これだけの存在感、おそらくこれは妖怪の“心臓”だ」

「なんだそれは？」

「妖怪の核、魂みたいなものだ。こいつ、心臓をとられまいと地下に隠そうとしているのさ」

「なんだと!? じゃあ、さっさと切っちまわねえとな!」

その調子だ! やれ、ひとおもいにやってくれ!

だが、問題は時間だな。ゆっくりではあると言っても、確実にコブは降りてきている。早く切らないと手遅れになってしまう。

そこで、人間たちはチェンソーを取り出した。ブオブオとエンジンをふかせる。よっしゃ! 文明の利器最高! これならいける!

『さて! まつてくれ! 頼むからそれだけは……!』

「こつちにも都合があるんでな。悪いが、それはできねえ相談だ!」

ブイイイイギユアアアッ!

とうとう幹に刃が入った。その振動は、俺にも痛みとなって伝わってくる。まだ、俺と六島苞はつながったままなのだ。痛みも共有している。しかし、ここで弱音を吐くことはできない。これも荒療治だ。我慢我慢!

『ヤメテ! キラナイデ! イタイ! タスケテ!』

……ちょっと、可哀そうな気もするけど、お前も俺にとんでもないことしてくれたからなあ。自業自得だ。

チェンソーはさして抵抗もなく、ずぶずぶと幹に食い込んでいく。自分の体の一部を切り離される感覚はぞつとしない。目の前で腕をぶつ切りにされているようなものだ。痛みを気絶しそうになる。耐える、俺……!

そして、メキメキというきしむ音がしたかと思うと、どずっつん

と木が倒れる音が響いた。俺は自分の体の中に六島苞の存在を感じない。

（勝った……！）

俺は勝利の味を噛みしめた。

5話「妖怪化」

「うわ、なんか幹から出てきたぞ。つかまえる！」

「これが六島苞の心臓か。研究所に高く売れるぞ！」

地上では、人間たちの喜ぶ声が聞こえる。俺もおめでとつと一声かけてやりたいが、体がまだ動かないのでじっとしておこう。しかし、ほどなくして辺りが騒がしくなってきた。

「なんだ、どうした!？」

「妖怪だ! 森の妖怪たちが出てきやがった！」

「ちっ! 妖怪封じのシールドがもたなかったようだな」

「どうする、まだ六島苞の木材を切り出してないぜ!？」

「……諦めよう。今の装備じゃ、やりあうのはきつい」

「ちくしょう、せつかくここまで来たつてのに!」

「いや、収穫ならあったさ。六島苞の心臓を手に入れた。これだけでも目ん玉が飛び出るくらいの金になるぜ！」

人間たちは逃げるように帰って行った。六島苞は研究所というところに売られるらしい。元気だな。

その後、何かの気配がぞろぞろと俺の上に乗ってきてるのを感じ

た。妖力を感じる。ということは、こいつらが人間がさつき言っていた妖怪か。こんなに大勢の妖怪と接するのは初めてのことだ。今までに会った妖怪は、迂木と六島苞だけだからな。

「六島苞様が切られてしまったぞ！」

「なんということだ……これでは、森を守る結界がなくなってしまっ
まっ」

「おのれ、人間どもめ！」

あれ？ もしかして、六島苞って結構慕われてたのかな。こんなに多くの妖怪に悔やんでももらえるなんて。そういえば、結界を張ってたのは六島苞だったな。ということは、間接的にこの森の妖怪たちを守っていたということになるのだろうか。

あと、この妖怪たち普通に人語が話せるんだな。妖怪ってみんな
念話で話すのかと思ってた。

「……いや、待て！ 何か地中にいるぞ！」

「本当だ！ とてつもない妖力を感じる。これは六島苞の妖力だ
！」

あれあれ？ まずいぞ、俺のことがばれてる。

言われて気づいたが、俺の体にはとんでもない量の妖力がため込まれていた。六島苞の芋にされていたせいだ。俺の体に六島苞の全妖力が結集されていることになる。

「切り株の下から感じる。六島苞様！ そこにおられるのですか
!?!」

どうしよう。返事したほうがいいのかな。それはそれでややこしくなりそうだし。

「六島苞様が我々に何か残してくださったのかもしれない。掘り起こしてみよう!」

うわあ、結局面倒なことになりそうだな、おい。

* * *

それから大勢の妖怪たちが集まって、切り株を引っこ抜く作業が始まった。俺の体は相変わらず動かない。念話を使えば土の中からも呼びかけることができるのだが、何と声をかければいいのかわからず、困り果てていた。そもそも六島苞とこの妖怪たちの関係ってどんなものだったんだ。

掘り起こし作業は難航したようだ。そりゃこれだけデカイ木である。切り株もでかい。根も広大にひろがっている。昼も夜も休みなく、妖怪たちは働いた。

三日目にして切り株の周りの土を取り除いていく作業がようやく終了し、それから引っこ張り上げるため、奮闘しているらしい。話を聞いていると、てこ原理で持ち上げてロープで引きずりだす算段のようである。

「オーエス! オーエス!」

まるで祭りのような熱気で作業は続けられた。そして、5日目。ついにお披露目である。

「これが六島苞様の根っこか……!」

「でっけえ岩がからまってやがる。だからあんなに重かったのか」

「さて、この岩から妖力を感じるぞ」

岩？ 今の俺は岩に見えているのだろうか。

それより、問題なのはこれからどうするかということだ。依然として体はがっちりとかに拘束されるように固まっていて、ピクリとも動かせない。さすがに俺も焦ってきた。このままずっと固まったままとか、ないよね。まさか、六島苞の呪いとか？

妖怪たちには、俺の姿はでかい岩に見えるらしい。絡みつく木の根を取り払い、水で洗ってきれいにしてくれたようだ。あざっす。

「さて、取り出してみたはいいものの、これが何なのかさっぱりわからないな」

「翡翠のように綺麗な緑色だな。欲深い人間たちならば、途方もない価値で扱っだろう。もしかして中に何か入ってるんじゃないか？」

「……壊してみるか？」

「バカな！ 六島苞様のバチがあたったらどうする!？」

「もう根っこも掘り出しちゃったんだし、今さらじゃねえか」

『いやさてさて!』

「」「」「!」「」

しまった！ 妖怪たちが物騒なことを言いだすから、つい念話で話しかけてしまった。

「これは念話……！ ということは、六島苞様なのですか!？」

『あー、なんだそのー……俺は六島苞だっ!』

しまった！ 勢いに任せてつい口から出まかせを言っちゃった。

「おお！ 六島苞様は生きておられたんですね!？」

『い、いや、俺はまあ、六島苞であって六島苞ではないというか』

「どういふことでしょうか？」

くそう、ここまできたら出まかせで全部押し切るしかない！

『六島苞と呼ばれた物は、俺の表層にすぎん。俺は強すぎる力を自ら封じ込めるために、あえてあのような姿をとっていたのだよ！ 人間たちが表層部分を刈り取ったため、封印が解けてしまったよ
うだな』

「なんと！ そうでありましたか！ さすがは六島苞様です！」

半分以上嘘だが、いいや。どうせ、ばれやしないさ。

だが、いつまでも六島苞様と呼ばれ続けるのはさすがに嫌だな。

『その六島苞という名だが……それはあくまで俺の表層につけられた名前だ。俺の名前は葉裏という』

「そうでしたか。失礼いたしました、葉裏様」

『うむ。それで、俺は長らく眠りについていたので、最近の事情について疎い。というか、ぶっちゃけあんたら、だれですか?』

「ええ!? 我々のことを覚えてないのですか?」

『お前たちと接していたのは、表層だからな。俺自身は眠っていたのだ。まず、俺がどれだけの間眠りについてたのか知りたいな』

「さようですか。しかし、そう言われましても、六島苞……葉裏様は我々のような有象無象の妖怪とは一線を画する存在であります。どれだけの悠久の時を生きてこられたか、我々には想像だにできません。少なくとも数千年はくだらないのではないのでしょうか」

どうも、かなりの時間、俺は冬虫夏草状態だったようだ。

でも、確か前に六島苞に会ったときは、一万年生きてたって言ってたな。少なくとも、それだけ分の妖力が俺の中にあるということになる。

『で、人間がいるようだ。奴らとはどういう関係なのだ?』

「はい! 人間は我々妖怪の宿敵です! 傲慢なる人間は我々のすみかを脅かし、無秩序に森を切り開き、河を汚します! 駆逐すべき存在です! あるいは、葉裏様に手をかけようとするとは、何と不屈きな……」

『俺が結界を張っていたはずだろ? それはどうなった?』

「葉裏様の結界は永らくこの森を守護してくださいました。人間どもも、手出しができないほどの強力なものです。我々は油断していました。人間はカガクという恐ろしい術を使います。おそらく、葉裏様の結界は人間のカガクの力によって破られたのではないかと思われます」

妖怪の妖術と人間の科学が対峙する世界なのか。六島苞つてめっちゃ強い妖怪なんだろう？ その力を無効化するとか、人間側強すぎじゃないか？

『結界を破られた原因はわかったのか？』

「はい。この森の結界は葉裏様の“小株”によって形成されています。一か所だけ、小株が枯らされていました。何かの薬を使って小株を攻撃したでしょう。人間の薬は植物に多大なる被害を与えます。普段は小株を見張る妖怪がいるのですが、警備の隙を突かれました。面目次第ありません」

なるほど、六島苞の小株で結界は作られていたのか。なら、あの人間たちは草枯らしでもまいたのだらう。植物系妖怪の弱点を突いたわけだ。

『六島苞……俺の表層は強かっただろ？ 人間たちに対して結界以外の対抗策はなかったのか？』

「ええ、六島苞様は確かに強大な力をお持ちでしたが、それは守りの力でした。この森は人間の都に最も近い妖怪の拠点です。人間の都から発せられる“カガクブツシツ”によって、通常なら枯れ果ててしまうはずの森を、六島苞様が結界の力で浄化されていたのです。我々がここに住めるのも六島苞様の結界のおかげでした」

六島苞の妖術は戦闘向きではなかったようだ。拠点を作るのには優れているが、一度内部に侵入されると手出しができなかったのだらう。

なんかやばい気がしてきた。六島苞、性格は悪いけど、妖怪の社会に貢献してたんだな。どうしよう、あっさり死んじゃったよ。

「そういうわけです、今、この森には結界がない状態なのです。お目覚めのところ、申し訳ありませんが、なにとぞ新しい結界を葉裏様に作っていただきたいのですが」

『え？ あー、結界？ ハハツ！ 結界ね、結界！ ……ちよつと、無理かなー、なんつて』

「え……」

妖怪たちの顔は見えないのだが、辺りがざわざわと騒がしくなる。それもそうだ。いきなり自分たちの住む森が安全ではなくなると言われたのだから、動揺しないわけがない。

「な、なぜなのです！？ 警備を怠った我々への罰でしょうか！？」

『いや、そうじゃない。あの結界を張っていたのは確かに俺の表層だが、その表層である六島苞が死んだのは事実だ。今の俺には結界を張る術が使えない』

これは正直に話すしかない。使えないものは使えないのだ。嘘についてもすぐにわかる。妖怪たちは絶望したかのような悲鳴を上げ始めた。ど、どうしよう……

「で、では、この森はもうおしまい、なのでしょうか……?」

『……………』

「このまま人間に追い立てられるがまま、ここを立ち去るしかないとおっしゃるのですか!?!」

『……………』

「葉裏様! 我々はこれからどうすればいいのですか!」

『……………』

「ああ、六島苞様が生きていらっしやっただのなら、こんな思いはしなくてもすんだのに!」

『……………』

「もしかして、葉裏様は六島苞様と同一の存在ではないのではありませんか?」

『な、なにをコンキョにソナナこという!』

「そうだ、六島苞様と葉裏様が同じ存在だというのなら、どうして同じ結界の術が使えないんだ! おかしいじゃないか!」

『だから、それは俺の表層がだな……………』

「表層、表層ってオラたちには意味がわかんねえよ! もっとわ

かるように説明してくれ！」

「そうだ！ ちゃんとした説明をしろ！」

「あなたはこの森を守る存在ではなかったのですか!？」

「俺たちはあんたのことをずっと信じてきたのに」

ええい、うるさい。なんだこいつらは。政治家にクレームをつけるプロ市民か。

妖怪たちの訴えはだんだんとただの罵声になっていく。いい加減、俺も頭に血が上ってきた。好き勝手に言いやがって。俺に何の責任がある。俺はただ生きようとしただけだ。だいたい、お前たちが文句を言うべき相手は俺じゃないだろ。お前たちの敵は人間じゃないのか。

『かーーーーーっ！』

俺は能力を使った。それまで怒鳴り声をあげていた妖怪たちは、ぴたりと声を止めた。一斉に俺に視線が集まる。皆が俺に“注目”した。

『ピーピー泣きわめくんじゃねえよ、お前らは生まれたての子ガメか!？ いつまでも六島苞様を守ってくれるからこの森は安心だあ!？ 甘ったれるんじゃねえ! お前らはいつまで六島苞のすねをかじる気だ!？ 妖怪なんだろ! 強いんだろ!？ だったら、立ち向かえばいいじゃねえか! 人間どもをブツ潰してやればそれで済む話だろが!』

俺はマイビッグマザーを思い出した。小さな俺たち兄弟を残して

去って行った迂木。俺たちや所詮畜生だ。ボンボンおぼっちゃまじやあるまいし、泣きわめけば誰かが助けてくれるなんて考えること自体が間違ってる。

「で、でも、俺たちだけじゃ人間には勝てない……この森に妖怪が住めるのは、結界があつたからで……」

『六島苞は俺だつて言つただろ。あいつの力は、今、俺の中にある。あいつは結界術を使えたが、俺が使える力は違うのさ』

「葉裏様は、どんな力が使えるのですか！？ もしや、かつての六島苞様を上回るほどの力が……」

『さあな。使つたことないからわからん』

「……ズコー！」「」

なんだお前ら、ノリノリじゃん。

『だが、俺が強力なチカラを持っていることは確かだ。だったら、対策はいくらでも立つ。そうだろ』

妖怪たちは静かに俺の話に耳を傾けていた。俺の説得は無駄ではなかったようだ。徐々に気力を取り戻していく様子がわかる。

『人間なんてとるに足りねえ！俺ら妖怪の底力を見せつけてやるんだよ！ わかつたか、野郎ども！』

「……ウオー！」「」

こうして、俺はこの森をまとめる妖怪の親玉になった。
って、なんでだよ!?

6話「人化」

ちよつと熱くなりすぎたと思つたら、いつの間にか俺は妖怪のリーダーになつていた。

もともとそんな気はこれっぽっちもなかったのだが、乗りかかった船に乗らされてしまった感が否めない。まあ、六島苞に対する罪悪感も少しはあつたのかもしれない。この力はもともといつのだ。あいつはこの力をこの森を守るために使つていた。それはもちろん打算があつたと思うが。力は持つだけで責任を生む。俺にはこの森の妖怪たちをあおつた責任もあるのだ。その言質くらいきっちり自分で面倒みたいと思うのだ。

はつきり言つて、六島苞の力を奪つたことを後悔なんてしていない。奪われた方が悪いのだ。もともと自分の力ではないからと言って遠慮する気もない。これは紛れもなく、今の俺の力に他ならないのだから。そして、六島苞の背負つてきた物を俺が引き受けなければならぬ義務感なんてものは微塵も感じていない。

正直な話、これはただの傲慢なのかもしれない。俺がちっぽけなカメだつたころ、生きること必死でそれ以外のことなんて考えている余裕はなかった。しかし、今はこうして何の因果か有り余るほどの力を手に入れた。その余裕があるから、なんとなく、妖怪のリーダーという重役を引き受けてしまったのだらうか。

まあ、そんな俺の気持ちの話はさておいて、妖怪の森は人間との決戦に向けた準備に入つていた。元人間として、妖怪と殺し合うことにためらいはあるのかという……ない。不思議なものだ。人を殺すことに嫌悪を感じない。善良な人間を進んで殺したいとは思わないが、その程度の感情だ。妖怪にとって、人殺しは種族的な禁忌ではない。むしろ、人間は科学が発達する以前まで妖怪の食糧にされていた。俺はやはり、身も心も妖怪になつてしまつたということ

だろうか。

結果がなくなって森はじわじわと化学物質による汚染を受け始めている。早急に都を襲う作戦を立てなければならぬ。

だが、その前に……

(いつになったら、俺は動けるようになるんだ?)

俺が親玉に就任してから三日、いまだに体を動かすことができない状況が続いている。妖怪たちには、封印が解けたばかりで慣れていないだけだと言いつつ来たが、さすがにそれも限界だろう。

この三日、俺は自分自身の体を徹底的に調べていた。そして、わかったことがいくつもある。

まず、俺が動けない理由。それはそう苦労せずに判明した。原因は甲羅の重さだ。なぜか、俺の甲羅がめちゃくちゃ巨大化している。全長10メートルくらいである。そのせいで重すぎて動けないのだ。

さらに、甲羅の大きさは巨大化したのに、肝心の俺の体そのものは大きくなっていないのである。いや、正確には大きくなっていないわけではない。15センチのミドリガメだったころと比べれば格段に成長している。1メートルちよつとくらいにはなっているような気がする。しかし、それでも甲羅の大きさと比較すれば極小と言わざるを得ない。したがって手足が外に出せない。体がすっぽり甲羅の中に埋もれてしまっている状態なのだ。

なぜ、こんな体になってしまったのか。その原因も自分なりに仮説は立った。

マイビツグマザーは妖怪だった。二百年生き続けて妖怪になった。もし、俺の妖力成長率が迂木と同程度だとすれば、俺は確実に二百年を超えて生きていると計算できる。それほどまでに俺の妖力は成長していた。迂木の体の大きさは軽自動車くらいあったが、俺の体はせいぜい1メートル。確かに体長で言えば迂木の方が大き

かったが、内包する妖力の量では俺がまさる。かつての記憶と照らし合わせて見ても、明らかに俺の妖力の方が大きい。

それは、六島苞の妖力を取り込んだのだから当然だと言われそうだが、少し待ってくれ。さっきの話は六島苞の妖力を抜きにした話である。つまり、俺自身が一つの個体として長い年月を生きただめに得ることができた妖力についてのことだ。

では、六島苞の妖力はどこにいったのかというと、それが問題である。なんと、すべて俺の甲羅にため込まれていた。すなわち、俺の肉体は俺自身が得た妖力で成長したが、俺の甲羅は六島苞の妖力を詰め込まれた結果、ぱんぱんに膨れ上がってしまった、というわけである。そのため、肉体と甲羅との間の成長に不均等が生じたのだ。

この不均等を解決するため方法は一つしか思い浮かばない。甲羅の妖力を俺の肉体に移し替えるのだ。そうすることで甲羅は縮小し、ちょうどいいサイズにもどる。

六島苞の妖力を自分の体に取り込むことについては問題なかった。長い間くっついていたせい、取り込んでも違和感はない。しかし、大変だったのはその量である。とにかく、甲羅の中の妖力が多い。どれだけ肉体に移し替えても小さくならない。いくら拒絶反応が出ないからと言っても、常時輸血状態ではさすがに気持ち悪くなってくる。しかも、このエネルギーは熱力学の法則に忠実なようで、エネルギーが高い方から低い方へと移動しやすい性質があった。そのため、気を抜くとドンドコもっさり妖力を甲羅から肉体へ送りつけられてしまう。妖力の移動は細心の注意を払って少しずつ行わなければならなかった。

「なんだか、葉裏様の体が小さくなっていないか？」

「え？ た、確かに心なしか縮んだ気がする……葉裏様、いかがなさいましたか！？」

『だ、大丈夫だ、気にするな……ゲフツ!』

その後も順調に移し替えは進んだ。確実に甲羅の大きさは小さくなっていく。だが、なぜか俺の肉体の方はどれだけ妖力を吸っても肥大化しなかった。妖力の多さが体長と比例しているわけではないのか。

どんどん小さくなる俺を見て、妖怪たちが心配している。とりあえず、動きやすいように姿を最適化していると言っておいた。

そして七日目。俺はついに日の光を拝むことになる。

「う、うっ……」

「葉裏様!」

妖力の摂りすぎで頭がくらくらする。俺の周りには妖怪たちが集まっているようだ。

「なんとか、外に出られたみたいだな……あれ? 俺、人語を話せるぞ?」

カメだったときは当然、人の言葉など話せなかったが、妖怪化した影響だろうか、ちゃんと言葉を発音できる。まあ、喋れて困ることはない。

「どうだ、これが今まで封印されていた俺の真の姿だ!」

今の俺は、きっとマイビッグマザーのように美しいカメにバージョンアップしているはずだ。妖怪たちもあまりの神々しさに絶句して……

「「「……」」」

絶句している。なんだ？ 思っていた反応と違う。俺の姿はどうなっているんだ？

少しずつ光に慣れてきた目で、自分の姿を確認する。甲羅は暗緑色で宝石のように輝き、手足は真っ白くすべすべでぷにぷにした肌である。

「えっ！？ ちょっと待て！」

俺は二足歩行で駆け出し、近くの水辺へと向かう。そして、水面に映る自分をその目で見た。

少女だ。美少女がいる。甲羅と同じ深い緑色の髪に瞳で、整った顔立ち。肌は陶器のように白くなめらか。そして、何より目立つのは甲羅だ。体がすっぽり甲羅の中に収まっており、それぞれの穴から頭と手足が出ている状態、つまり、ガメラの着ぐるみでも着ているかのような格好なのだ。

「なんじゃこりゃあああああ！？」

俺の精神はかつてない大ダメージを受けてしまった。

7話「戦いどころじゃない」

整理しよう。

聞くところによると、長い年月を生き、妖力が高まった妖怪は元の姿とは異なる形へと体を変化させることが多いらしい。これは自分の種族の普遍的な形状という範囲に固定されていた肉体と、妖力によって強靱になった精神の間で乖離が生じ、その違いを中和するために起こる現象のようだ。人型に体に変化する者は割と多い。だから、俺の体が人間っぽくなったことはそう珍しいことではない。

どうして、美少女に変化したのか気になったが、そういえば俺は雌ガメだったし、さらに言えば、実は前世でも子ども頃はこんな容姿をしていた。小さいころはよく女と間違われたものだ。もうとてつもなく昔の記憶なので、すっかり忘れていた。

そこまではいい。納得できる。問題は、俺が完全に人化しなかったということだ。甲羅が残っている。非常に間抜け。

「だあああ！　ちくしょおおお！」

「葉裏様、落ちついてください！」

想像してほしい。幼い少女がカメの甲羅をすっぽり着用している姿を。かっこ悪すぎる。すごくかっこ悪い！　俺はどうしても我慢ならなかった。どうして、100%人間か、100%カメの体になかったのだ。なぜ混ぜたし。そんなハイブリッドは要らない。そういえば、前世の世界のアメコミに、忍者で亀のミュータントが登場する作品があった。あれの中途半端なコスプレ状態である。

さらに、この甲羅、クソ重いのである。ものすっごい肩が凝る。俺がプレスをきめると、地面が陥没する。軽く歩くだけでズシンズ

シンと音がする。少女姿の俺がトコトコ歩くその擬音がズシンズシンだぞ。能力なんて使わなくても視線を一人占めだ。そんな物を背負って肩が凝るくらいくらいですむのだから、俺も強くはなっていないのだろう。しかし、それとこれとは話が別。俺はこの甲羅をなんとかできないか必死に模索した。

だが、うまくいかなかった。甲羅は背中側と腹側の二つのパーツがあり、どうにか分離できないか試してみたが、だめだ。この甲羅も体の一部である。引っぺがすことはできそうにない。甲羅の妖力をもっと吸い取って小さくできないか試してみたが、一向に変化がない。それに俺の現時点での肉体の容量では、これ以上妖力の移し替えはできそうになかった。妖力の飽和状態で吐きそうになる。それ已然の問題として、甲羅が小さくなったところで取り外すことができなければ意味がない。まったくの無駄骨だった。

しかし、俺は諦めていない。何が何でもこの甲羅をはずしてみせる。それから、俺は人間との戦いなどそっちのけで、甲羅との戦いを繰り広げることになる。

検証その1：高所からの落下

「いくぜっ！ おらああああ！」

俺は高い崖の上から躊躇することなく飛び降りる。一瞬の浮遊感。そして、急速落下。地面に激突する前に、手足と頭を甲羅の中に引っ込める。ちなみに、どういうわけか甲羅の中は質量保存の法則を無視するかのような無限スペースになっている。どう考えても人体では構造上不可能な動きでにゅるんと甲羅の中にもぐりこむことができた。手に物を持ったままでも中に入れる。しかも、その物を甲羅の中に入れっぱなししておくことができるのだ。まるで、四次元ポケット。便利である。

そして、崖から飛び降り甲羅の中に避難した俺は、見事崖下に着

地する。すさまじい地響きがおき、隕石でも落下したかのようなクレーターができる。だが、甲羅は無傷。

検証その2：崖上から岩を落とす。

「こいやっ！ おらああああ！」

今度は妖怪たちに協力してもらい、崖の上から巨大な岩を転がして落してもらった。その崖の下に俺がいるという寸法さ。

岩は俺の甲羅に直撃した。殻の中に引っ込んでいた俺には、岩が落ちる音は聞こえたが、直撃を受けたというのに何の衝撃も感じない。むしろ、生き埋めになったことの方がこまったが、その岩は片手で持ち上げることができたので、無事脱出できた。甲羅に比べれば断然軽い。

検証その3：火あぶり

「やけやっ！ おらああああ！」

妖怪の中には、妖術によって火を起こせる奴が何匹かいた。そいつらにありったけの炎を出してもらい、甲羅を焼く。これがほんとの甲羅干しだ。

甲羅の中にいる俺はまったく熱さを感じなかった。10分くらいこんがり焼かれたが、やはり無傷。先に妖怪たちの妖力の方が尽きた。俺の背中のマイホームは、安心の耐火設計のようである。

他にも様々な苦行を自らに科したが、甲羅の防御力はそのことごとくに耐えきった。六島苞の妖力が詰め込まれた結果、妖力が結晶化して金属をも超える硬度になってしまったみたいだ。美しい緑色の光沢は色褪せることがない。

ところで、妖怪たちは俺のマゾ苦行を見て、なぜか士気があがっ

ている。検証によって様々な攻撃をことごとく跳ね返した行為は、俺の力を見せつけるパフォーマンスになったようである。事実、防御面に関しては今のところ不安はない。攻撃面でも以前に増してかなり強化されている。少女の見た目からは想像もつかないほどの怪力を発揮できる。この森には俺より強い妖怪はいないようだった。

尊敬のまなざしで見られるのは面映ゆいところだが、なんにせよ士気が高まったのはいいことである。甲羅については、現状では手出しできそうにない。そろそろ、人間たちとの戦いに備えて本腰を入れていくか。だが、俺は絶対に諦めない。いつか、この甲羅を脱ぎ捨ててやる！

8話「妖怪四天王」

人化してから、俺は衣服を着ていない。はだかんぼうである。甲羅のせいで着物を着ることができないのだ。まあ、妖怪なんて大半が素っ裸の連中であり、別におかしくはない。甲羅のせいで露出している部分は頭部と四肢だけだし。だが、立ち上がると常にガニ股猫背の姿勢を強要されるのはいただけない。まるで四股を踏む相撲取りのごとくである。すべて甲羅のせいだ。忌々しい奴め。二足歩行は早く移動できて便利だが、甲羅の重さが尋常でないので長時間立ちっぱなしでいるのはきつい。なので、いつもは寝っ転がっている。

そのうち、寝たまま移動する手段はないものかと考えつき、手足をひっこめた状態で転がりながら走る“甲羅ローリング走法”を編み出した。坂の上から転がると、障害物をなぎ倒しながら進むことができ、爽快である。攻防一体のなかなか使える技だ。

それはさておき、人間との戦について。とりあえず、情報を集めることが先決だ。人間の都がどのような防備を持っているのか知らないとは掛けることもできない。鳥型の妖怪を編成し、偵察部隊を作ってみた。彼らが集めた情報によると、都は“シールド”と呼ばれるもので守られているらしい。これは結界のようなあやかしの技ではなく、科学的に作られたエネルギーフィールドであるようだ。科学と妖術の相性は悪い。物理法則によって徹底的に理論武装された科学技術は、妖術のようななんだかわからない曖昧な力を強く拒絶する。妖術でこのシールドを破壊することは難しいという結論に至った。

シールドを破るためには、物理的な方法で攻撃するしかない。幸いにも、シールドは対妖術に重点を置かれた設計になっているのか、強い衝撃に対してはそこまでの耐久力を持たない。なぜ、シールド

の性質がわかるのかというと、以前、森に入ってきた人間が個人用の簡易シールド形成装置を装備していたことがあつたらしく、そのときの経験から推測できたという。力押しに弱いようだ。

人間側は妖術さえ無効化できれば、妖怪など恐るるに足りないと思っているようだ。まあ、その考え方はもつともである。妖術を封じられれば、あと俺たちに残された手段といえば怪力くらいのものしかない。例外的に、『程度の力』に関しては、シールドの防御効果も薄いという。だが、能力持ちは数が少ない。俺も含めてこの森に、5匹くらいしかいなかった。それに、必ずしも戦闘に役立つ力ばかりではない。俺みたいにな。

となると、後は兵の数を集めて正面突破するくらいしか方法はなわけだ。人間側もその手は十分に予想できるので、対策もされているに違いない。詰んでないか、これ？

「うぬー、だめだ。うまくいかない」

今、俺は人間に対抗するための兵器が作れないかと模索している。といつても、この森にある資源と言えば木材しかない。さすがに鋤脈が都合よくこの地にあるということもなかったし、砂鉄があるとしてもそこから精製するなんてやり方も俺は知らない。木でなんとかするしかない。

とりあえず、俺は投石機が作れないか試案してみた。だが、俺は投石機の詳しい構造なんて知らない。なんとなく形は思い浮かぶが、それを現物にすることは話が別だ。まずは小さな模型を作っているところだ。それが完成したら、本格的な製作に取り掛かるつもりである。

しかし、うまくいかない。どうやって作ればいいんだ？

「葉裏様、何を作っているのですか？」

「ん？ これは投石機といってな。大きな岩を遠くに飛ばすための道具だ。これをたくさん作れば、遠くからシールドを破壊することができるかもしれないだろ？」

「ほう、そのような道具があるとは知りませんでした」

「いや、俺も詳しく知らないから、今試算中なんだ。というか、煮詰まっている。手を貸してくれ」

そう言ってみたが、妖怪は難しそうな顔をするばかりだ。

「葉裏様、まことに言いにくいのでありますが、その投石機というものは人間の作る道具ではありませんか？」

「確かに、そうだな。それがどうした？」

「“道具を作る力”は人間の領分でございます。我々妖怪には、複雑な人間の道具を作ることはできません」

人間と同程度の思考力を持っていれば道具の作成くらいいけないと思っていたが、どうも違うらしい。妖怪は種族的にモノを作るといふ行為が苦手なのだそうだ。実におかしな感覚だが、言われてみれば確かにも思う節がある。かれこれ数日は投石機の製作に頭を悩ませていたが、一向に良い案が浮かばないのだ。これは妖怪の性分なのか、それとも俺の頭がアホなのか。

妖怪は便利な道具を手に入れようと思ったら、人間から奪うことでしか得られない。中には鍛冶が行える妖怪などもいるそうだが、それでも都のような科学技術には到底及ばない文明レベルの品である。この妖怪の不器用さが、人間にすみかを追われる敗因になったのだろう。

これでは、仮に投石機の設計図が完成したとしても、妖怪たちを動員して量産させることなんて到底できそうにない。投石機は諦めるしかないか。

「それだと、本当に正面突破しか他に方法がなくなつたな。援軍の要請はどうなつた？」

この森にいる妖怪の数はせいぜい1500匹程度である。それに対して、人間の都にはその規模から見ても1万人くらいはいると思われる。圧倒的に数が足りない。妖怪一匹の強さは容易に人間一人を上回るが、それにしたって少なすぎる。それに、人間には高度な文明によつて生み出された兵器がある。武装した兵士なら、十分に妖怪とも渡り合える。そこで、援軍の要請は急務だつた。

求めた先は、妖怪四天王と呼ばれる連中である。なんか、逆に弱そうに聞こえるがそんなことはないらしい。六島苞もその一匹だつたとか。後の三匹も強豪揃いのようで、この森のようにそれぞれが拠点を構え、多くの妖怪を従えているそうだ。今回の戦いに協力してくれるかどうか、打診してみた。

「はい、それが……色よい返事をいただけしたのは、東の猪々獄様のみでございました」

「まあ、そんなもんか」

妖怪だから人間との一大決戦をやると言えば、血の気の多い連中が集まるかと思つたのだが、現実は厳しい。一匹集まつただけでもよかつたと言える。はたして、猪々獄とやらがどれほどの軍勢をひきつれて来てくれるのか、期待してまつしかないだろう。

9話「気になるアイツはイカしたブタ面」

さて、それからしばらくした後、援軍がこの森に到着した。

その様子は圧巻だった。なんとその数、5000匹である。百鬼夜行どころの騒ぎではない。地を埋め尽くさんばかりの妖怪たちがこの森へとやってきたのだ。正直、ここまで数をそろえてくれるとは思っていなかった。嬉しい誤算である。

遙か東の地から旅をしてきた彼らを、森で受け入れ、休ませた。

妖怪の森はかつないほどのにぎわいを見せている。これだけの数が集まったということは、おそらく人間に知られているだろう。5000もの妖怪の行軍を隠すことなんてできない。軍を動かす以上、しかたのないことだ。六島苞が死んだことは人間側も知っているはずなので、拠点を失う危険を感じた妖怪たちが決起することは、向こうも予測していた可能性だろう。人間側も、妖怪たちが吊い合戦に来ると踏んで、戦いに備えていると考えていた方がよさそうだ。

俺は森の深部、六島苞の切り株が残る沢にいた。協力者である東の妖怪四天王、猪々獄に挨拶をするためだ。これだけの妖怪を引き連れて来てくれた彼には、感謝しなければならぬ。到着からほどなくして、猪々獄は現れた。名前からなんとなく予想がついていたが、ブタの妖怪である。

「よく来てくれた、猪々獄よ。俺はこの森をまとめる妖怪、葉裏だ。このたびの戦いに手を貸してくれることを深く感謝する」

「……お前は誰だブヒ？ この森の長は北の妖怪四天王、六島苞ではなかったのかブヒ？」

猪々獄の見た目は、猪八戒のような感じと言えばわかるだろうか。

人間とブタを掛け合わせたような容姿をしている。背中には5本の
大槍を担いでいた。腹周りにはだぶついているが、腕の筋肉はモリモ
リだ。しかも、その体格はかなりのもので、背は5メートル以上あ
りそうである。見かけ倒しではなく、妖力もすごい。さすがは四天
王を名乗るだけのことはあり、六島苞とタメを張るくらいの実力が
あると一目でわかる。妖力の多さで言えば、俺の方が勝っているよ
うだが、戦闘力で言えばどちらが上かわからない。
でも、語尾にブヒをつけるのはやめてほしい。

「六島苞は俺の異称だ。これからは葉裏と呼んでくれ」

「ふん、クソでかい木の妖怪だと聞いていたが、実際会ってみれ
ば、なんともまあちびっこい亀妖怪だブヒ。こりゃあ、人間にやら
れるわけだ！ ブヒヒヒヒヒ！」

猪々獄の挑発とも取れる軽口に、援軍の妖怪たちが合わせて笑い
だす。それを見たこの森の妖怪たちは、自分たちの親玉を馬鹿にさ
れ、怒り心頭といった表情になっている。ここで喧嘩させれば土気
にも影響がでる。俺は怒り出す妖怪をなだめた。

「まあ、そう言うな。これからともに人間と戦おうと言うのだ。
仲良くやっていこうじゃないか」

「人間をぶつ殺すことに関しちゃ、異論はねえブヒ。そのために
俺様のかわいい手下どもをあつめてやったんだからな。だが、戦の
前にはつきりさせておきたいことがあるブヒ。それは、俺様とお前、
どちらが大将にふさわしいか、ということだ」

なるほど、それはもつともだ。トップが二人いたのでは、指揮系
統が混乱する。混合軍を形成する以上、どちらの長の命令が優先さ

れるか決めておかないといけない。

猪々獄は、背中から槍を一本抜きとり、ぶんぶんと振り回してその槍先を俺に向けた。

「俺様と勝負しろブヒ！ 勝った方がこの軍の指揮をとる。どうだ？」

俺としては、指揮権を猪々獄に譲ってやってもいいと思っているが、この戦闘狂にそんな話は通じないだろう。それにここであっさり負けを認めると、それはそれでこの森にもといた妖怪たちの士気が下がりそうだしな。

「いいだろう。受けて立つ！」

「ブツヒツヒ！ そうこなくっちゃなあ。おら、お前は武器を構えなくていいのか？」

武器ねえ。正直、この森で調達できる武器なんて石器の斧くらいしかない。こん棒は俺の筋力をフルパワーで使って振ると一瞬で壊れてしまう。石器はそれよりも若干マシといった程度なので、使えるものがない。素手で殴った方がまだいい。

「俺の武器はこの体一つさ！」

「上等だブヒ！ 俺様は東の妖怪四天王、猪々獄！ いざ、尋常に勝負っ！」

名乗りを終えた猪々獄は剛速の槍を突きだしてきた。はい！俺は反応できずにモロに突きを食らってしまった。俺の腹の甲羅装甲がその攻撃を防ぐが、突きの威力はすさまじく、体が後方に吹き

飛ばされる。

「ぐっうう！　なんて衝撃だ……！」

槍を食らった腹のあたりがジンジンと痛む。初めて肉体にダメージを通された。相変わらず甲羅に傷はついていないが、衝撃が内部まで届いている。このブタ、やりおる。

「……驚いたブヒ。まさか俺様の槍を無傷で防ぐとは！　それに、その体の重さ、はんぱねえブヒ。俺様の手の方が痺れちまったブヒ。妖怪四天王の名は伊達じゃねえってことか。ブヒヒヒヒヒ！　こいつは面白くなってきたブヒ！」

今度は俺の方から仕掛ける。さっきは猪々獄の突きに対応できなかったが、それは俺の経験不足が原因であって、やろうと思えば素早く動ける。俺は猪々獄の懐に踏み込み、拳を放つ。

「くらえ！」

「はあ！　なんだその攻撃は！　遅すぎるブヒ！」

「なに！？」

脂肪でたぶたぶの巨体のくせに、こいつは俺の拳を難なくかわした。確実に俺より速く動ける。それを認めなければならぬ。拳を突きだした俺の体勢は隙だらけだ。そこに鋭い槍が連続して襲いかかってくる。

「ちいいいいっ！」

俺は甲羅ガードで猛攻を耐える。ぐおう！ モーレツウ！

甲羅で防いでも自転車とぶつかったくらいの衝撃は通る。地味に痛い。

パンチが届かないとなれば、他の手で攻めなくては。俺は妖力弾を放った。迂木が使っていた技と同じものだ。妖力をたんまりもっている今の俺なら何発でも打ち出すことができる。妖力弾は確かに速い。しかし、威力が弱かった。猪々獄に当たっても全然ダメージを与えた様子はない。相手も高い妖力を持っているので、当たる直前に相殺されているのだろう。それにほとんど避けられている。

「ふぬっ！ その甲羅は厄介だブヒ。ならば！ 甲羅以外の場所を狙うブヒ！」

今度は甲羅から露出している手足を狙ってきた。ま、当然だよな。こちらもその手は読んでいた。右腕目がけて突きだされた槍。俺は右腕を甲羅に収納する。

「な、なんだブヒ！？」

「はっはっは！ そう簡単にやられるか！」

猪々獄は予想外の動きをされたことに驚いている。そこにわずかな隙ができた。今だ！

俺は甲羅の中に入れていた木の実を取り出す。これは、散歩中に見つけた物だ。蜜柑のような見た目をしているので、食べられるのかと思つて少ししかじつてみたところ、壮絶な辛さに悶えることになった。これは何かの武器に使えるかもしれないと思つて甲羅の中に大量に入れておいたのだ。

それを空中に放り、妖力弾で打ち抜いて炸裂させた。

「なんだこれは、うわあああ！ 目がしみるうつつ！」

果汁が周囲に飛び散り、猪々獄の目に入った。俺は頭を甲羅に引っ込めて回避した。よし、この隙に攻撃だ。

頭を収納しているので前が見えないが、前方に感じる猪々獄の妖力はわかるので位置は特定できる。そこ目がけて渾身の蹴りを入れる。

「ぐふうっ！」

やわらかい肉を蹴る感触がした。頭を出すと、腹を押さえてよめく猪々獄がいた。追撃しようとする、さつと後ろに飛び退ってかわされる。そう何度も奇襲は通用しないか。

「はあああ！ やってくれたな、子亀妖怪！ もう容赦はせんブヒ！」

今の一撃は効果があったようだが、猪々獄を倒すには至らなかった。タフな奴だ。目潰しのせいで涙目になって見えない視界もすぐに回復するだろう。

「当たり前だ！ 最初から容赦なんかすんじゃねえ！ 全力で来い！」

これは長期戦になりそうだな。

10話「バトルの末に」

それから戦いは三日続いた。まして。

猪々獄は執拗に俺の露出部を狙ってくるので、俺は甲羅に完全避難し、甲羅ローリング走法で戦った。手足を引っ込めているので、殴る蹴るの暴行ができない。転がって体当たりしても避けられるのが目に見えているので、ちまちまと妖力弾を撃って攻撃した。たまに激辛蜜柑攻撃を織り交ぜたりしたのだが、二度も通用する相手ではなかった。

その攻防が三日も続いたのである。観戦していた妖怪たちは、最初の一日は固唾をのんで見守っていたが、今ではこの泥仕合の有様に呆れて退屈しているようだ。

戦いは俺が守りで猪々獄が攻めという形で延々と続いた。それにしても、猪々獄のやつ、なんて諦めが悪いんだ。疲労困憊でふうふう息をつきながらも、まったく手を休めることがない。5本あった槍もすでに4本が苛烈な攻撃の負荷に耐えきれず折れている。俺は甲羅に閉じこもって妖力弾を撃ち続けられただけなので、楽なものだ。この際なので、甲羅ローリング走法を練習してみた。今では自由自在にブイブイいわせることができる。さすがに猪々獄の動きはそれより速いので、攻撃は当てられてしまうのだが、うまい衝撃の受け流し方がわかってきたので、今では食らってもそんなに痛くない。

「なあ、猪々獄。もうそろそろ俺の勝ちってことでいいじゃないか？」

「いいや！ はあ、ふう、まだまだブヒ！ まだ終わらんブヒ！
ふひー！」

「だったらお前の勝ちってことで、もういいからさ」

「黙れブヒ！ 俺様は負けないブヒ！ 今に見ている！ こんな甲羅、粉々に砕いてやるブヒー！」

パキン！

そのとき、何か割れる音がした。最後の一本の槍も折れてしまったのか。

いや、違う。

「ちょ、ちょっと待ってくれ、猪々獄！」

俺は甲羅ローリング走法で距離を取り、頭と手足を外に出した。猪々獄の方を見れば、その手に持つ槍はまだ折れていない。では、さっきの音は何だったのか、恐る恐る甲羅を確認する。

猪々獄の攻撃に耐え続けた甲羅は、以前と変わらぬ傷一つない美しさで光っている。だが、背中側と腹側の二つのパーツのつなぎ目に違和感があった。そこに手を当て、思いっきり引っ張る。

パカア！

「……開いた……」

まるでドアでも開くようにすなりと動いた。どさりと甲羅が俺の背中から滑り落ちる。俺は自分の体に目をやる。男だったころいた相棒はなくなっており、胸はほんのりとふくらんでいる。いや、そんなことより俺はその少女のおなかを見ることができたことに歓喜した。それはつまり、俺の苦しみからの解放を意味する。

「とれたーーーーー！」

天に向かって手を広げながら嬉しさのあまり絶叫した。全裸で。これで、もうかっこ悪くない。普通の人間と同じ姿だ。普通って、すばらしい！

「ぶ、ブヒヒヒヒ！　とうとう俺様の攻撃がお前の自慢の甲羅を砕いたようだな！　もうお前を守る盾はないぞ！　くらええええ！」

俺が幸せをかみしめていると、猪々獄が槍を突きだしてきた。なんて無粋な奴だ。しかし、今の俺は確かに防御力が落ちている。あんなぶつとい槍を食らったら、さすがにただではすまないだろう。猪々獄が放つ渾身の一撃。俺はなんとかそれをかわそうと横に飛ぶ。

「……………！　な、なんだ!？」

ぎりぎりで槍をかわし、牽制の拳を繰りだそうと思っていた。だが、自分の思惑とはまったく異なる事態が起きていた。回避のために行った横っ跳びによって、十メートルほど移動していたのだ。

(体が軽い……………！)

どういうわけか、体が羽のように軽い。そうか、甲羅を脱ぎ捨てたからだ。甲羅分のウエイトがなくなった今、俺は以前以上のスピードで動くことができる！

俺と猪々獄のスピードは互角になった。しかも、相手は疲労している。勝機が見えた。妖力弾で猪々獄を足止めし、その隙に素早く後ろへ回り込む。

「これで終わりだ！」

「ぐぼう！ へばぶっ！ ぐあああああ！」

俺のラツシユが猪々獄をとらえた。そして、長きにわたる戦いにようやく決着がついたのであった。

* * *

こうして、妖怪軍の最高指揮官は俺に決まった。猪々獄は副指揮官である。いかに妖怪四天王の一匹といえども、三日の死闘の疲労は色濃く、戦いの後はダウンして動けなくなっていた。

それから、甲羅について調べてみた。冷静になって考えると、もしかしてブツ壊れてしまったのではないかと不安になったが、そんなことはなかった。なぜか俺の体と分離しても妖力を失わずにいる。背中側と腹側のパーツが、二つにカパツと開く仕組みは便利なもので、これにより、甲羅は着脱可能になったのだ。甲羅の中を覗き込んで見たが、光を当てても真っ暗で何も見えない。手を入れると、ずぶずぶとどこまでも沈んでいく。中に何か入っていたので取り出してみると、激辛蜜柑だった。腐っていた。そつと中にもどした。どうなってるんだ、この甲羅。

俺は甲羅を抱えて沢の水の中に入った。やっぱり甲羅がないと動きやすい。肩も凝らない。実に気分爽快である。体を洗っていると、改めて女になったのだなあ実感した。だが、特に感慨はない。周りには妖怪たちがわんさかいるのだが、その中で全裸で水浴びしても、羞恥心など起こらなかった。姿形は人間に似ているが、今の俺は似て非なる者なのだ。前世の頃の俺の感覚と、今の俺の感覚ではかなり違いが出ているのかもしれない。自分では、はっきりとわからないのだが。

全裸森ガールとなった俺が、仁王立ちで体を乾かしていると、猪

々獄がやってきた。

「おう、体はもう大丈夫なのか？」

「ブヒヒヒ！ 俺様はそんなにやわじゃねえブヒ。それにしても、まさかその甲羅が脱げるとは思わなかったブヒ。俺様の負けだな。お前、強えじゃないか。見なおしたブヒ」

猪々獄にさつきまでのトゲはない。自分が認めた相手には心を開くタイプなのだろう。戦いを乗り越えて友情が深まるというやつか。

「いや、違うな。惚れなおした、言った方がいいかもしれんブヒ」

「は？」

「俺の女になれブヒ。俺の子どもを孕めブヒ」

美少女とブタの化け物のカップリングって、それなんてエロゲ。ドン引きだよ。もちろん、丁重にお断りした。拳を鳴らしながら、丁重に、な。

11話「人妖大戦」

いよいよ、人間たちとの決戦の日が来た。俺たちは妖怪の大軍を率いて都を目指す。

俺と猪々獄はその先頭に立っていた。俺も妖怪だ。後ろでふんぞり返っている気はない。

「葉裏」

「なんだ？」

「この戦いが終わったら俺様と結婚してくれブヒ」

「嫌だ。あと、そのセリフは死亡フラグっぽいぞ」

猪々獄は、あれからずっと俺に求婚してくる。うざい。

「それより、昨日話した作戦はうまくいきそうか？」

「ああ、あれか！ まったく、葉裏は面白いことを考えるブヒ！」

妖怪軍の作戦は突撃の一択である。それ以外にやりようがない。シールドは360度死角なく都を覆い尽くしている。戦力を分散させてシールドの突破に手間取るより、一か所穴を開けてそこからなだれ込む方がいいだろうと、先日会議で決めた。人間側は1万の数がいるが、そのすべてが兵士というわけではないはずだ。妖怪側は6500。ぎりぎりなんとかするのではないかという目算だ。

ところで、俺は昨日、猪々獄の能力について話を聞いた。猪々獄

は『槍を遠くまで投げる程度の能力』を持っているという。その能力を聞いて、少し思いついた作戦があった。名付けて『槍と一緒にかつとびましよう作戦』。猪々獄の大槍に妖怪をくりつけ、投げてもらう。すると、あつという間に都のシールドを突破して中に侵入できるのではないかという作戦だ。妖怪ミサイルである。

結論からして、それは難しいと言われた。投げた槍はすさまじいスピードで飛ぶので、並みの妖怪では耐えられず、目的地に到着と同時ににはじけとび、死んでしまうらしい。しかし、例外的に並みの妖怪にとどまらない防御力をもったタフガールがいる。俺だ。俺ならおそらく着地の衝撃にも耐えられるし、孤立しても自分の力できるとかやっつけていけるだろう。そのため、俺の背中にはいつでも投げてもらえるように、すでに槍がくりつけられている。

森から出て、都を前にする平野で俺たちは一時停止した。都の方から何かが近づいて来る。こちらに向けて無機質な声で何か言っている。

『警告します。妖怪たちは直ちに引き返しなさい。これ以上、都市に接近した場合、武力を行使して対処します』

いくつもの銀色の塊がこちらに向かって走ってくる。とうとう、向こうからも兵が放たれた。躊躇してなどいられない。俺は声を張り上げた。

「全員、突撃いいいい！！！」

オタケビをあげて妖怪たちが走りだす。銀色の物体はロボットだった。ロボット兵だ。人間たちはこんな物を作り出していたのか。

俺は焦った。確かにこんなSFチックな科学技術を持っている奴らだ。ロボット兵くらいいてもおかしくはなかった。だが、もはや引き返すことなどできない。戦いは始まった。

ロボット兵は近づいてきた妖怪たちに向けて銃を撃つ。妖怪はひるまなかった。ちょっとやそつと腕とか足とかもげても平気な連中である。鉛玉を数発ブチ込まれたくらいじゃ死なない。俺と猪々獄は猛然とロボット兵の只中へと飛び込んでいった。

そこでわかったが、このロボット兵は銃を撃つしか能がない。接近戦に入れば木偶の坊も同然だった。

「ブツヒヒヒヒ！ まったく手ごたえのない奴らだブヒ！」

俺が妖力弾を乱射し、猪々獄が槍を一振りするだけでゴミのようにロボット兵は壊されていく。これなら他の妖怪に任せても大丈夫だな。

「猪々獄！ あの作戦、いくぜ！」

「そうか、ここは俺様たちに任せるブヒ！」

猪々獄が俺の背中の中の槍をつかむ。『槍と一緒にかつとびましょう作戦』のお披露目だ。

「うぐおおおお！？ お、おもいいい！！！」

「しっかりしろ、猪々獄！ それでも妖怪四天王か！」

「ふぬぐぐぐぐうっ！」

なんとか俺を担ぎあげた猪々獄は、ゆっくりと助走を始める。ずしんずしんと地面にくつきり足跡をつけながら、スピードをあげていく。前に立ちふさがるロボット兵は猪々獄の突進を止めるすべなどなかった。

「それじゃあ、俺は一足先に行ってくるぜ」

「いづくぞおおおおっ！ はあああっ！ ふんぐっ！」

槍が猪々獄の手を離れた。その瞬間、周囲の光景が急速に後ろに飛び去っていく。これは風速で皮膚がはがれそうだ。俺はたまらず甲羅に隠れた。

甲羅の中にはゴオオオという風の音しかなくなる。そして、何かにブチあつたような衝突音。これがシールドだろうか。音はすぐに止んだ。おそらく、シールドを突破したのだ。槍のスピードはさつきより落ちた気がしたが、それでもまだ速い。そして、さっきのシールドにぶつかったときとは比較にならないほどの音が甲羅の中に響き渡った。耳が痛い。

これは無事に着地できたということか。俺は外に顔をだそうとした。だが、目の前にある壁が邪魔して頭が出せない。どうやら、頭から地面に激突してめり込んでしまったようである。しかも、俺がめり込んだ先は何だか金属質な構造物のようで、がっちりと穴に甲羅がはまり込み、抜け出すことができない。ど、どうすれば。

「なんだこれは！ どこから入ってきた!？」

やべ、見つかった。

「妖怪の仕業でしょうか。まさか、シールドを突破して攻撃を与えてくるとは」

「ロケットの打ち上げは間もなく行われる。万が一に備えて警備を強化しろ」

「はっ！」

俺の姿は謎の物体として捉えられたらしく、特に警戒もなく、人間たちは立ち去っていた。攻撃に使用された武器としか思われなかったようだ。まあ、まさかこんな壁にめり込んだ意味不明の物体を妖怪とは思わないか。

それにしても、ロケットってなんだ？ 人間たちは何をしようとしているのだ？

『全妖怪どもに告げる』

そのとき、大きな声が響き渡った。さっきのロボットのような無機質な声ではなく、肉声を拡声器で大きくしたような響きである。

『我ら人間は、穢れきった地上を捨て、新天地に人間の文明を築く。これより、我らは月の世界へと旅立つ』

穢れきった地上？ 月の世界？ 何のことだ。

『さらばだ！ 低俗なる妖怪どもよ！』

そして、大地が揺れた。轟音とともに振動は大きく膨れ上がっていく。

『さらば、地球よ！ いざ行かん、月の世界へ！』

まさか、いや、そんな馬鹿な。人間は宇宙へ向かおうとしているのか！？

12話「宇宙に行ったカメ」

超展開すぎる。なんで宇宙。人間がそんな暴挙に出ることなど、予想できるはずがない。最初から宇宙に逃げることを計画していたのか。だから、あんな足止めにはかならないようなロボット兵しか前線に出さなかったのだ。結局、戦にすらならないまま妖怪と人間の戦争は終わった。

そして、俺は今、宇宙にいる。地球は本当に青かった。もはや茫然とするしかない。

あの大地震はロケットの発射音だった。思いのほか甲羅がめり込んでしまった俺は、死に物狂いで脱出を試みた。だが、時すでに遅し。なんとか抜けだしたときはすでに、地上は遥か眼下に小さく遠ざかっていた。俺が槍に乗って突き刺さった場所は、都市を丸ごと一つ運び出す超巨大ロケットの一部だったのだ。

今、自分がロケットのどの部分にいるのか見当がつかないが、外装の狭い隙間にもぐりこんで振り落とされないように必死に耐えている。大気はほとんどなくなっており、息苦しくてしかたがない。このまま宇宙空間に出たら窒息する。内部に行けば空気があるのだろうが、入口がどこかわからない。普通に入口から入っても、壊して中に入っても、人間に見つかるとは必至である。さすがにこの逃げ場のない状況で人間に捕まったら俺でもおしまいだ。

ロケットの飛行速度はとんでもない。考える間もなく宇宙空間に出てしまった。息ができない。苦しい。もうそろそろ死ぬんじゃないかという苦しさが1分続き、5分続き、10分続き……

（あれ？ 意外と長くもってるな）

息苦しさはあれど、いつまで経っても死ぬ気配がない。まあ、俺

は妖怪なので生物の範疇を超えているのかもしれない。現に30分くらい経過したあたりから、呼吸の必要性を感じなくなった。妖怪は息をしなくても死なないらしい。

さて、俺はこれからどうすればいいのだろう。ここでロケットをつかむ手を放せばスペースデブリの仲間入りだ。いや、地球の重力にひっぱられて落下するだろう。摩擦で燃え尽きて死ぬ。甲羅の中に入っていれば持ちこたえるかもしれないが、試す勇氣はない。

したがって、人間と一緒に月まで同行するしかない。というか、月なんて不毛の土地だろう。どうやって開拓する気だ。正気とは思えない。この人類はかなりSF色が強めだから、オーバーテクノロジーでなんとかするのかもしれないが、わざわざ地球を捨ててまで月に行くことになんの意味がある。確か、穢れがどうか言っていたが、意味がわからない。俺たち妖怪からしてみれば、汚染物質を垂れ流す人間の方がよっぽど穢れの元凶じみている。

ロケットは地球の衛星軌道に乗ると、そこでいったんエンジンを停止させた。確か、この軌道上を動く運動を利用して燃料の節約をするんだっけ。すると、またもやロケットが大きく振動を始める。今度は何をやる気だ。

しばらくしてわかったが、ロケットの三分の一ほどの部分が本体から切り離されていた。この切り離された部分に俺も乗っている。二つに分かれたロケットはどんどん離れていく。燃料をパージしたにしては規模が大きすぎる。もしかして、向こうの三分の二残った方を宇宙ステーションにして、こっちの小さい方を先に月に送るということが。

そして、俺がへばりついたロケットは月に到着した。小さい方とは言っても、その大きさは考えるのも馬鹿らしくなるほどだ。月に着くと、ロケットから無人探査ロボットが出てきた。俺はロボットに見つからないようにロケットから離れる。

(さて、いよいよ月に来てしまったな)

ため息を吐こうとしたが、うまくいかない。そういえば、空気もなかった。これでは言葉を話すこともできないな。話す相手がいないので困らないか。

人間の精神なら、たった一人仲間もなく身一つで月に放りだされれば、動揺なんてものじゃすまないだろう。しかし、妖怪の俺はなんだか気楽なものだった。社会という群れの中でしか生きていけない人間との種族的な違いというものだろうか。

とりあえず、俺も月を歩いて調べることにした。月面歩行は楽しい。悪いが人類より先に月の地面に足跡をつけさせてもらう。強く踏み込んでジャンプすると5メートルくらい浮き上がる。ふんよふんよして歩きづらいことこの上ないが。甲羅を脱ぐともっと高く飛べる。甲羅自体もかなり軽くなっていった。それでも手を放すとポトンと落ちるが。

人間だったら宇宙服着てないとここは歩けないよな。紫外線、直に浴びちゃってるけど、妖怪だから大丈夫だね。甲羅も脱いで脇に抱えているので、全裸状態である。昔、宇宙は空気がないから内圧と外圧の差で体が爆発するって聞いたことがあるけど、あれは嘘らしい。

昔の人の伝承と言えば、月のウサギを思い出した。夜空に輝く月の模様は餅をつくウサギに見えるとか。地球には妖怪がいたんだし、月にウサギがいるなんてファンタジーがあってもいい気がする。よし、月のウサギを探してみよう。

『そこにいるのはだれです!?!』

だが、探すまでもなく、俺は月のウサギ第一号に遭遇してしまったようだ。

13話「うれしくないウサ耳」

目の前に現れたそいつは、人間の男に近い形をしていた。最初は人間に見つかったのか慌てたが、どうやら人間ではないらしい。妖力を感じた。こいつは妖怪だ。

顔立ちもなんだかヨーロッパの人っぽい彫りの深い感じだ。アングロサクソン系というのか。都にいた人間たちは純日本風の顔立ちだったから新鮮だ。金髪碧眼のイケメンである。ただ、残念なことに頭頂部にウサギの耳らしきものがくっついていていた。バニーガールの耳を想像していただきたい。あれがもつとリアルになったみたいなの。ピクピク動いてるし、偽物ではなさそうである。

月のウサギがイケメンウサ耳男とは、非常にがっかりだ。腐女子なら喜ぶのだろうか。

『あなたは何者です！ その、どうして裸なのですか！？』

そういえば、この月ウサギは服を着ていた。妖怪の森にいた連中はあんまり人型の者がいなかったし、居ても人外っぽいのはわかりだったので、服を着るといふ慣習がなかった。せいぜい、腰布としてぼろきれを巻く程度である。俺は甲羅を脱ぐと完全な人型の妖怪だが、常にフルヌード生活を送っていた。月ウサギは、なんとというか中世ヨーロッパの兵士のような格好である。こいつらには服を着る文化があるのだろうか。

確かに見た目年頃の少女がすっぱんぼんなのは、健全な感覚からすれば色々とまずいな。だが、顔を赤らめて視線をそらすイケメン月ウサギの様子がなんかむかついた。警戒は解かないが、直視はできず、頬を赤く染めながら初心な少年の甘酸っぱい思春期模様を体現したかのようなその表情。そんなサービスはいらねえんだよ。

『悪い悪い、服着るから』

俺は服、というか甲羅を着る。ナチュラルに念話で会話したが、空気がないのだからそれも当然か。念話は音を媒体にせず、相手の頭の中に直接言葉の概念を伝えることができる妖術なので、月ウサギ語がわからない俺でも意思疎通ができる。

『変わった服装ですね。それに、どうしてあなたには耳がないのですか？』

『俺はウサギの妖怪じゃないからな。もともと耳はない』

『??？ 何を言っているのかわかりません。あなたの言葉の概念が理解できません』

『あー、俺は月の妖怪じゃないんだ。信じられないかもしれないが、俺は地球から来た』

そう言っつて、俺は空に見える地球を指差す。だが、月ウサギは苦笑いをするばかりだ。

『からかっているのですか？ アースからここへやってきたなんて、おとぎ話ではあるまいし』

やはり、簡単には信じてくれないようだ。俺はどう説明しようかと頭を悩ませる。

『それよりも、ここに居ては危険ですよ。昨日、この付近でデスフロッグとの戦闘が行われました。もしかすると、狩り残しがいる

「かもしれません」

『ですふるつぐ？　なんだそれ？』

『はあ……デスフロッグを知らないなんて、どこの箱入りお嬢様ですか？　とにかく、ここは危険なので、村に避難して……』

そのとき、俺はわずかな殺気を感じ取った。妖怪の殺気は、妖力が微量にこめられるのでわかりやすい。どこから来ているのかと耳を澄ます。

『どうしました？』

『静かに！　近くに何かいるぞ！』

月ウサギの方は気づいていないようだ。俺が警戒の声をかけた瞬間、それは現れた。なんと、地面を突き破って。

『な、なに！？　下から！？』

何か巨大な影が地中から飛び出してきた。まったく、気づかなかった。そうか、音で接近を探ろうとしていたが、そんなことをしても無駄だ。ここには音がない。

出てきたのは、でっかいガマガエルの妖怪だった。緑と紫が混じったマーブル模様の体皮、ぶつぶつと飛び出たイボとギョロ目、人間なんて一口で平らげてしまいそうな大きな口、間違いなく妖怪である。

『ガマアアアッ！』

『デスフロッグ……！　ここは僕が注意を引きつけます。その隙にあなたは逃げてください！』

イケメン無理すんな。妖力から見て、実力はあちらの方が上手だ。ただ、月ウサギは両刃の西洋剣を装備していた。見たところ立派な剣である。武器があればなんとか対抗できるかもしれない。しかし、それでもこちらに分が悪い闘いになるだろう。

妖怪ガマエルはデスフロッグという名前らしい。気持悪い動きでびよんびよん飛びながらこちらに向かってくる。無音なのがシユールだ。

『来い、デスフロッグ！　僕が相手だ！　はあああっ！』

月ウサギが剣を構えて踏み出す。その動きは予想外に速かった。一足で敵の側面に移動し、その太い足を切りつける。球状に丸まった血がぽこぽここと飛び散った。

『ガッ、ガマアアアッ！？』

意外に強いな。動きのキレが違う。苦戦するかと思われた闘いは終始、月ウサギの優勢が続いていた。ただ、見た目通りデスフロッグは体力があるようだ。月ウサギの攻撃は、致命的なダメージを与えるに至らない。

『どうして逃げないのですか！？　早く逃げて！』

はっ、俺は他人ごとのようにその場に突っ立つたまんまだった。俺も加勢した方がいいよな。せつかく出会った月ウサギに死なれては困る。色々聞きたいことがあるのだ。

『ガマツ!』

そこで、やられっぱなしだったデスフロッグに動きがあった。体表から得体のしれない気味の悪い色をした粘液を分泌し始めたのだ。見るからに毒ですと主張している色あいだ。これには月ウサギも手が出せないのか、後ろに下がって距離を取る。

しかし、デスフロッグはその隙を見逃さなかった。大きな口をかぱりと開くと、そこから勢いよく長い舌が飛び出す。カメレオンのように伸びた舌は月ウサギの足にからみついた。

『しまった!』

『ガマアツ!』

月ウサギがデスフロッグの口の中に引きずり込まれようとしている。これはまずいな。俺はすぐさま伸びきった舌に向けて妖力弾を撃ち出した。

『ガファツ!?!』

獲物を仕留めた気になっていたデスフロッグは、思わぬ攻撃を受けて動揺した。焦りで月ウサギをつかんでいた舌を放してしまう。月ウサギはその一瞬で逃げ出すことができたようだ。

しかし、デスフロッグは次に俺を標的に選んだらしい。こちらにビシビシ殺気を放ってくる。口をかぱりと開いた。これはカメレオン攻撃がくるな。俺は横に飛んでかわそうとした。

『あ、あれ? 体がうまく動かせない』

しかし、ここが月だということをしつかり失念していた。体が軽

すぎて地面を蹴っても浮遊感が邪魔して思うように移動できない。さっきの月ウサギの戦闘を見ていたせいで感覚がおかしくなっていた。どうして月ウサギはあんなにシャープな動きができたんだ？

『やばっ!?!』

『ガマアアアッ!』

避けられなかった。舌が俺の胴体に巻きつく。そのまま踏ん張ることもできず、デスフロッグの口へと運びこまれる。

『やめろ!』

月ウサギが叫ぶが、デスフロッグが言うことを聞くはずもない。俺はとっさに甲羅の中にもぐりこむ。まあ、これで食われてもなんとかなるだろ。

ごっくんされた俺はデスフロッグの胃に収まった。それじゃあ、カエル爆竹花火ごっこを始めるとしよう。

『妖力弾、回転掃射!』

俺はデスフロッグの胃の中で甲羅ローリング走法を行う。ついでに妖力弾のおまけつきだ。内側からの攻撃には、さすがに耐えられない。

『グエエエエエエッ!』

おなががパーン!

断末魔の悲鳴とともにデスフロッグは破裂したのであった。

14話「夢のウサ耳ランド（棒読み）」

『うわ、べつとべとだなこれ』

俺はデスフロッグの胃袋から生還を果たすことができた。ぐちよぐちよの粘液と飛び散った臓物で甲羅が汚れてしまったが。

『……………』

さて、俺がふと視線をやると、月ウサギが剣を振りかぶった体勢のまま固まっていた。信じられない物でも見たかのような表情だ。

『おーい、大丈夫かー？』

『はっ！？ それはこちらのセリフです！ あなたは無事なので
すか！？』

『見ての通りだ』

デスフロッグの妖力は俺の足元にも及ばない。妖怪の森にいた仲間たちを基準すれば、下の上くらいの強さだ。せいぜい毒が気持ち悪いところくらいしか厄介な点はなかった。

そんな俺の様子を見て、月ウサギは呆れている。

『本当にあなたが何者なのか気になります』

『俺の名前は葉裏だ。さっきも言ったが地球の妖怪だ』

『ヨウリさん、ですか。僕はロバートと言います。あなたには聞きたいことがたくさんあるのですが……とりあえず、移動しましょう。ついて来てください。村に案内します』

村があるらしい。妖怪の村、というのはなんかひっかかる言い方だ。村とは人間が作るものである。妖怪は群れをつくることはあるが、その住処はせいぜい“巣”といったところだ。まあ、今のところ友好的に受け入れてくれていようなので、おとなしくついて行くことにしよう。

* * *

月ウサギの村は地下にあった。月のクレーターを中心にカモフラージュした巣穴の入り口がある。その中に入って行くと、そこには別世界が広がっていた。

地下の空間はかなりの広さがある。光源は火ではなく、青白く光る石だった。驚いたことに植物が生えている。水もないのにどうやって生きているのかと思っただが、どうやらこの植物、ただの草ではない。妖力を感じた。これも妖怪の一種なのか。もう何でもありだな。

村には結構な数の月ウサギの姿があった。大人も子どもも男も女も、みんな頭にウサ耳が生えている。これは妖怪っていうか宇宙人って言った方がしっくりくるな。地球の妖怪と違って、実に人間らしい暮らしをしているのがわかる。ここに生息している植物も、月ウサギたちが管理して育てているのだろう。

村に入ってきた俺を、月ウサギたちは興味深そうに見つめてくる。不思議と警戒はしていない。もっと排他的な雰囲気があると思っただが、よそ者である俺のことを拒絶する様子はない。それよりも好奇心の方がまさっているといった感じだろうか。

ロバートは話しかけてくる月ウサギたちをやりわりとあしらいつ

つ、穴の奥へと進んでいく。奥にはいくつもの横穴があった。その中の一つに入る。

『ロバートです。巡回からもどりました』

『入れ』

横穴のさらに奥に進むと、先がすだれのようなもので仕切つてある。ドアの代わりみたいなものだ。ロバートに続いて俺も奥へと進む。そこには、数人の月ウサギがいた。年配の男ばかりである。無論、こいつらにもウサ耳がある。誰得。

『どうした、何か異常があったのか？ ……その者は誰だ？』

ウサ耳おっちゃんの一人がさっそく俺の方を見て疑問をぶつけてきた。さて、どうやって話をつけようか。

『彼女はヨウリ。巡回中に会いました。その直後、デスフロツグの襲撃を受けたのですが、彼女の協力でデスフロツグを倒すことができました』

『なんと。そうであったか。ロバート一人の力では、デスフロツグを倒すことはできなかつただろう。礼を言う』

『いや、まあ、どういたしまして』

『して、そなたはどここの村の者だ？ この村を訪ねてここまで来たのか？』

『……ちょっと、信じられないかもしれないが、俺の話聞いて

くれ』

それから、俺はここに来た経緯を話した。俺は地球にいたこと。そこで人間と戦ったこと。人間は月へ向かうため、ロケットに乗って宇宙へ出たこと。そして、俺はそのロケットにしがみついて不本意ながらここへ来てしまったこと。

すべてを話し終えた俺に、月ウサギたちが向けた目は怪訝なものだった。

『にわかには信じられん話だ。我々にとってアースは死後の魂が向かう天上の地。仮にそなたがアースからやって来たとなれば、そなたは天上に住まう存在ということになる』

『地球はそんなたいしたところじゃねえよ。まあ、こことはだいぶ違うが、俺はあんたらと同じ妖怪だ』

『わからぬ。ヨウカイとはなんだ？ そなたは玉兔なのか、それとも我らとは異なる存在だと言うのか』

月ウサギの正式名称は『玉兔』というらしい。しかし、なんで妖怪という概念が伝わらないんだ？ 俺もこいつらも肉体に妖力が宿っている。だったら、同じ妖怪なんじゃないのか。

『妖怪つてのは、俺たちみたいな奴らのことを指す総称だ。お前たちは玉兔って言うんだろ？ それも妖怪の一種ってわけ。あと、デスフロッグとか言う奴もな』

『……我らとデスフロッグをいっしょくたにされるとは。なんともおかしい物の考え方をする。やはり、我らには理解できん』

なんか話がかみ合わないな。なんで、こんな簡単なことが伝わらない。

いや、そういえば、『妖怪』って言葉はなぜあるんだ。それって、『人間』と対になる意味があるから成立しているんじゃないか。対立する存在があつて、それぞれにそれを表す名前がつけられただけにすぎない。人間がいなければ、そもそも妖怪なんて言葉は生まれなかったはずだ。

『えつと、ここには玉兔とデスフロッグと、それから他にどんな奴らがいるんだ？ 人間はいるのか？』

『この地には、我々玉兔とその宿敵デスフロッグしかない。ニンゲンという者も聞いたことがない』

なるほど、月には妖怪ウサギと妖怪カエルしかないのか。人間が生活できる環境じゃないからな。だったら、玉兔たちが自分を妖怪と定義しない理由にも納得がいく。しかし、二種類の妖怪しかないなんて、地球と比べるとなんとも多様性がない場所だな。

『すまないが、そなたの話を信じることができん。アースからこの地へ渡る船を作るなど、それこそ神のなせる業だ。そなたは自分がアースから来た存在だと言うが、耳を失った玉兔にしか見えない』

『ウサ耳なんて最初から生えてねーって』

俺は根気強く説明を続けたが、やっぱり信じてもらえなかった。別に俺は自分がどんな存在と認識されようとかまわないし、玉兔の世界観にけちをつける気もないのだが、一つ気にかかっていることがあるのだ。それは、人間についてのことである。

人間は貪欲に環境を食いつぶして成長していく種族である。前世

に俺がいた世界では、侵略する側とされる側、その争いの結果が悲惨なものに終わることは歴史が証明している。人間が月の先住民に敬意を払って接するというのは考えにくいと思ってしまうのが正直な感想だ。同じ妖怪として、玉兔が人間にやられるのを黙止するのは気が引ける。

けど、信じてもらえないのならばかたがない。一応、警告はしたのだ。後は玉兔たちの判断にゆだねよう。

15話「服を着よう」

必死に地球のことについて喋りまくったせいだろうか、俺はおつちやんウサギどもから憐みのこもった視線を集めていた。人を頭のかわいそうな子ども扱いしやがって。しかも、身寄りのない孤児と思われ、この村で面倒を見てもらうことになった。

お世話になるのは、ロバートのウサギさん一家である。最初はさすがに厚かましいと思ったので断ったのだが、ロバートはぜひ家に来てほしいと言ってきた。まあ、力には自信があるので、俺にもやれる仕事はあるだろうし、一方的に養われるつもりはない。手伝えることは手伝おう。たくさんある横穴の一つ一つが各家庭の住まいになっているようで、さっそくお家にお邪魔した。ロバートの家は、父と姉との三人暮らしである。母親は随分前にデスフロッグに食われたらしい。なむ。

『姉さん、ただいま』

『おかえりなさい、ロバート。あら？ そっちの女の子はだれ？』

家で迎えてくれたのは、ロバートの姉のモニカという玉兔だった。ようやくまともなウサ耳女子に会えた。目の保養とは、まさにこのことだろう。

『この子はヨウリ。わけあって、今日からうちで預かることになったんだ』

『ええ！？ほんとに！？』

『どうも、ヨウリです。地球の妖怪です』

モニカはやってきた家事を放りだしてこちらに走って来た。なんだか目をキラキラさせてぶるぶる震えている。そして、何を思ったのか俺にいきなり抱きついてきた。

『か、かわいい〜！』

すりすりとはりつきしてくる。初対面の相手にこの過激なスキンシップ、気持ち悪い奴だ。まあ、美少女なので許す。モニカの胸がぶよぶよ自己主張しているの、とりあえず揉む。

『おっぱいでかいな、モニカ』

『かわいい〜！』

『ね、姉さん……』

快く迎え入れてくれたようで何よりだ。互いの自己紹介を終えた後も、モニカは俺に抱きついて放れない。暑苦しい。俺は強引にモニカを引き剥がす。

『やんっ！ もう少しだけハグを〜！』

『やかましい。離れろ』

『ちえー。ところでヨウリちゃんのその格好……かわいいんだけど、少し変じゃない？』

それについては同意せざるを得ない。この甲羅スタイルは紛れも

なく変だ。だが、そう正面切って直球の言葉をぶつけられると、反論できなくてイラツとくる。むかついたので、甲羅を脱ぎ捨ててすっぽんぽんになってやった。ロバートが慌てて後ろを向く。

『こら！ ヨウリちゃん、年頃の女の子が簡単に肌をさらしちゃいけません！ 待ってて、服を持ってくるから』

モニカは服を用意してくれた。植物の繊維で編まれたワンピースだ。そういえば、まともな服を着るのはこれが初めてである。ワンピースはごわごわしていて着心地はあまりよくない。しかし、妖怪が服を作るといふのは、なかなか斬新である。妖怪はおしなべて物作りが下手な奴らばかりだと思っていたが、そうでもないらしい。

『私のお下がりでけど、大きさもちょうどいいみたいね。取っしておいてよかったわ』

『スカートよりズボンの方がいいんだけど』

これだと股部分の布が邪魔で甲羅を装着できない。ズボンなら邪魔にならないのだが。

『そう？ でも、お父さんやロバートのズボンはサイズが合わないだろうし……後で私が作ってあげるわ』

『よろしく。あ、動きやすいように短パンにしといて』

我ながら思うが図々しい。

モニカたちと話していると、家にだれかが入って来た。渋い、いぶし銀のおじさまウサギだった。なんかバーボン、って感じの。ロバートとモニカの父親のようだ。名前はジョージ。俺がこの一家に

世話になるということをロバートが話したが、少しも動じた様子はなかった。二言三言、言葉を交わしただけで後は何も言わない。別に嫌われているようではないので、単に寡黙な性格なのだろう。こうして、俺は月のウサギこと玉兔のとある一家に同居させてもらうことになったのであった。

* * *

それから数日が経ち、俺も玉兔たちの村に慣れてきた。玉兔は人間っぽい暮らしをしているが、やはり妖怪に近い種族である。食事は日に一回、地下の畑で取れた穀物からできるモチのような物を食べる。俺も御馳走になったが、結構つまかった。妖力が豊富に含まれており、これ一個で腹がふくれる。

妖怪に必要なエネルギーは妖力である。妖力は自然界に満ちており、黙っていても体に取り込むことができる。だが、それだけでは足りない。もっと効率よく大量の力を手に入れる必要がある。そのため、妖怪にも“飢餓感”が存在する。空腹が過ぎれば存在が消滅してしまう。

一番手っ取り早い方法は、力ある他者を捕食することだ。新鮮な生命ならなおよい。俺はそれしか妖力を得る方法を知らなかったのだが、森の妖怪たちは別の方法で飢えをしのいでいる者もいた。捕食ができない弱い妖怪は、人間をおどかしてそこに生まれた恐怖の感情を食う。妖力は闇の力である。恐れや怒り、憎しみといった負の感情が生まれると、そこに集まりやすい性質があるのだ。ただ、この方法で集められる妖力は少ない。

そうそう、ところで俺は物を食べなくても死なない体になっていた。六島苞と融合していた影響か、俺は光合成で妖力を生産できるのである。日向ぼっこで甲羅干しすると、お腹が膨れる。俺の甲羅は光妖力合成機能を持っていた。植物の妖怪の特徴なのか、捕食をしなくても生きていける。

玉兎たちは、道具作りが得意な妖怪だった。植物の繊維やデスフログの皮を用いて衣服や防具を作り、驚くべきことに熱を使わずに金属を加工する妖術を持っていた。どうやって作るのか気になったが、工房には入れてもらえなかったので、方法はわからなかった。ジョージはこの村一番の武器職人らしく、『金属を加工する程度の能力』を持っているので材料さえあれば、どんな剣でも作り出せるという。

『父さんは一流の剣職人だし、剣術の達人でもあるんだ。僕が目標だよ』

『ふーん』

俺とロバートは巣穴の外、月面に来ていた。穴倉の中にずっと引きこもっているとなんだか元気がなくなる。ひなたぼっこは気持ちがいい。六島苞に寄生されていた時代の名残かもしれない。光合成で元氣ハツラツ。

俺は村の自警団に臨時入団している。最初は玉兎の大人たちに見た目でみくびられていたが、妖力弾をぶっ放して見せると態度が変わった。と言っても、デスフログの襲撃は最近あつたばかりなので、今はそこまで忙しい時期ではないようだ。半年に一回くらいのペースで襲撃があるらしい。一応、周辺のパトロールの任務を与えられたので、ロバートと一緒に村近辺を歩いて回っている。

『そうだ、ヨウリ。よかったら、僕と手合わせしてくれないかな？』

ロバートは強くなりたいという向上心が人一倍あるようだ。暇を見つけては剣の練習をしているところを見かける。まあ、暇なので少し付き合っただけか。

16話「寡黙なる職人ダンディズム」

試合の勝負はあっけなくついた。俺の負けだ。俺はロバートへ向けて妖力弾を発射したが、それをことごとくかわされ、接近されてしまった。首に剣を突きつけられ、ジ・エンド。まあ、甲羅に引きこもれば俺の勝ちだっただろうが、そんな大人げないことはしない。

『なあ、前から気になってたんだが、なんでお前らはそんなに速く動けるんだ？』

ずっと疑問だった。宇宙空間で身動きすることは、水の中を泳ぐに等しいわずらわしさがある。俺は甲羅を脱いでウエイトダウンしてもロバートのスピードに追い付けなかった。重力が少ないと浮力がつく。すると、踏み込み際に地面から離れる時間が長くなる。宙に浮いている間、自分の体を制動することができない。速く動くようにして強く踏み込むと、そのまま進行方向に吹っ飛んでしまうのだ。かと言って弱い踏み込みでは、コントロールはできても緩慢な動きしかすることができない。

その点、ロバートは違った。まるで、地上を動いているかのようなスムーズな動きで月面を駆ける。いや、それ以上だ。浮力すら利用して空中を泳ぐように移動することができる。

『これは玉兔に伝わる体術だよ。『兔跳』、『兔狩』、『白兔』という三つの技を使いこなす術さ。ヨウリは『白兔』の技に関しては、すばらしい才能を持っているけど、それ以外があんまり得意じゃないみたいだね』

『そんな技を使った覚えはないけど。もしかして、妖力弾のこと

か？』

玉兔は妖力弾のことを『白兔』と呼ぶようだ。玉兔の戦士の中でも、俺ほどの弾幕を張れる奴はいない。言っちゃ悪いが、持っている妖力量の桁が違うからな。

『『白兔』は三技の中でも最も使うことが難しい技とされているんだ。強い“フォース”を持つ者しか使うことのできないからね。僕は才能がないからまだ使えないんだ』

あと、玉兔は妖力のことをフォースと呼んでいるようだ。スターウオズか。

『僕が速く動ける理由は『兔跳』を使っているからだよ。これは足の裏にフォースで足場を作って、それを蹴ることによって自在に動けるようになる移動術だ』

『妖力の足場？ そんなん不可能だろ』

どれだけ緻密なコントロールが必要になるか、想像もつかない。下手をすれば妖力弾で自分を撃ち抜くことになる。

『僕も修行を始めたころはできっこないと思ったけど、なんとか形だけは使えるようになったよ。まあ、全然未熟だけどね……』

ロバートは自虐的なため息をつく。くそ、そんな技があるなら俺も使えるようになりたい。

『もう一つ、『兎狩』って言ってたけど、どんな技なんだ？』

『『兎狩』は攻撃の技だよ。拳にフォースを集中させて、攻撃が当たる瞬間に爆発させ、その勢いを乗せるようにして直接相手にフォースを叩きこむ技さ。うまくいけば、相手の肉体の奥深くにダメージを貫通させることができる。達人になると、剣に『兎狩』の効果を付与させ、強力な斬撃を常に放つことができるんだ。僕はまだ練習中だけど……』

ロバートはため息をついて顔を手で覆う。なんか、こいつの顔を見てるとますます自分も玉兎三技を使いたくなってきた。

『ちつ、このまま負けっぱなしなのは癪にさわるからな。俺にもその体術を教えてくれ』

『え？ あ、うん。僕でよかつたら教えてあげるけど……』

なんで、そこで顔を赤くするんだよ。

* * *

それから数日、俺はロバートから玉兎三技の手ほどきを受けた。

『白兎』に関しては教えてもらう必要がないので、専ら『兎跳』と『兎狩』についてである。全然、できない。まだまだ練習がいるよ。うだ。

今は家族だんらんの時間、食事タイムである。ロバート一家と俺は同じ食卓を囲んで、一日一個のウサギモチをはむはむ食べる。

『ヨウリちゃん、前に言ってたズボンが完成したの。さっそく着てみて！』

モニカお手製の短パンを買った。俺の今の服装は、こわこわした

ベストに、ごわごわした短パン、そして蔓で編まれたサンダルだ。見た目はともかく、動きやすくてよい。モニカには感謝した。お礼に抱きつかせるとせがまれたので、おとなしく抱かれておいた。

『……』

相変わらず、一家の大黒柱であるジョージは寡黙だ。俺はまだ二、三回くらいしか話をしたことがない。コミュニケーション。

ん？ なんだか、ジョージが俺の甲羅をじつと見ている。今は服を着替えたところだったので、脱ぎっぱなしにして床に転がしていた。

『このアーマーは』

おお、ジョージの声を久しぶりに聞いたな。俺の甲羅に興味があるようだ。

『見たことのない素材でできている。さわってもいいか？』

『いいよ』

ジョージは甲羅を丁寧な観察し始めた。膝の上において、くるくる回しながら色々な方向から見ている。

『っ！ 重いな』

気合いを入れて持ち上げると自分の目の高さに合わせて観察する。地上だと並みの妖怪では持ち上げられなかった甲羅だが、月の重力なら玉兎でも抱えられるようだ。だが、それでもきついのか、すぐに地面に下ろして息をついている。

『このアーマーはだれが作った物なんだ？』

『あー……さあな。拾い物だからな』

本当のことを言っても信じてもらえなさそうなので、適当にごまかす。ジョージはそれっきり口を閉ざしたが、視線はチラチラと甲羅の方ばかり見ている。わかりやすい。

『俺の甲羅がそんなに気になるか？』

『……職業柄、つい、な。こんな金属は初めて見る』

ジョージは武具職人だった。『金属を加工する程度の能力』という力があれば、まさに天職だろう。自分の知らない素材に興味をもつことはわからないでもない。

あれ、そういえば、さっきジョージはなんて言った？ 「こんな金属は初めて見る」って言わなかったか？

『それは、金属なのか？』

『ああ、俺が能力を使えば、金属とそうでない物を見分けることもできる。これは、色々と混ぜられているが、金属の性質も持っている』

いつの間に俺の甲羅は金属化したんだ。確かにピカピカ光沢が輝いているけどさ。だが、そこで俺は重大な事実気がついた。

『と、いうことは、もしかしてこの甲羅を加工することができる？』

ジョージの能力があれば、この甲羅の形を変えられる。つまり、このかつこ悪いフォームをどうにかすることが出来る！ 俺はかつこよくなれる！

『……やってみないと、わからないが』

『本当ですか！？ お願いします！ この通り！』

俺は恥も外聞もなく土下座した。この甲羅がかつこよくなるのなら、どんなことだってする。悪魔に魂を売ってもいい。俺の態度が急変としたのを見て、この場にいた玉兔ファミリーは啞然としていた。

『しかし、このアーマーの形は確かに無骨だが、防具としての機能性は悪くない。改善する点などない気がするが』

『かつこよくしてください！ とにかく、かつこよく！』

ジョージは俺の要望に驚いているようだ。しかし、すぐに相好を崩し、ニヒルな笑顔を浮かべた。

『わかった。やってみよう』

『ありがとうございます！』

ジョージさん、まじダンディー。惚れたぜ。

17話「戦いの狼煙」

それから俺は毎日、ジョージの工房へ足を運んだ。毎日二回も行った。衝動を抑えきれず、三回行った日もあった。俺の甲羅の加工はとても難しいようだ。ジョージはまるで生き物と接しているようだと言った。

『このアーマーは生きている。そして、これは自身の形が変わることを望んでいるように思う。もし、このアーマーが俺の能力を拒絶していたなら、加工は不可能だった』

俺と甲羅は離れていても心は一つ。頑張つて素敵なメタモルフォーゼをとげてくれ。ジョージは職人の遊び心というやつか、製作途中の甲羅を見せてくれなかった。完成したら見せるという。ジョージの野郎、俺の心をもてあそびやがって。だが、その焦らし、嫌いではない。

『そうだ、アーマーの中を点検していたら、こんな物が出てきたのだが』

しなびた激辛蜜柑だった。捨てておいてくれと頼んでおいた。

『ほら！ また集中が途切れてるよ！ もっと体内のフォースを感じて！』

そして、俺は日中のほとんどの時間を玉兎三枝の鍛錬にあてていた。講師はロバートである。ロバートは、俺がジョージの工房のことを気にしているそぶりをみせると、なぜかすぐ怒る。口うるさい

ガキだ、まったく。

『全然、フォースの循環ができてないよ。それじゃ、いつまで経っても技は使えないよ』

玉兔はどうしてあんなに少ない妖力で三技という強力な術が使えるのか、不思議だった。その答えは妖力の運用のしかたにあるらしい。玉兔は少ない妖力を体の中で循環させることができる。その回転を徐々に速くしていくことで、体内にエンジンを作り出すのだ。そして、その回転力を極限まで高めたところで体外にバーストすることによって、爆発的なエネルギーを得ることができる。

理屈はわかった。だが、実践はできない。俺にとつて、妖力とは体の中に沈澱して静かにたゆたうモノでしかない。妖力弾はそこからすくった水を投げつけるような感覚で行う。妖力を回転させることはなんとかできるようになったが、ただぐるぐる回るだけだ。濁った汚い水槽の中の水をかき回すかの如くである。そこに爆発的なエネルギーが生まれる余地などない。むしろ、体の中を駆けまわる妖力の渦の影響で気分が悪くなるだけだった。

『おえっ！』

『ちよ、ヨウリ、大丈夫！？』

早くも諦めかけている俺。妖力の循環とか、もしかして玉兔の固有技能なんじゃないか？ できる気がしない。

『今日はこのくらいにしておこうか』

ロバートが俺の背中を撫でながら、帰宅を提案した。疲れた。今日は帰って寝よう。明日から頑張ろう、うん。

『おおーい！ たすけてくれーっ！』

そのとき、どこからか助けを求める声が聞こえた。助けを求める声って、なんだかトラウマなんだよな。見れば、クレーターの丘の向こうから、一匹の玉兎がこちらに走ってきていた。

『なにがあつたんだろう』

必死の形相で走って来た男は、衣服はボロボロで体も傷だらけだった。俺とロバートは警戒を強める。

『た、たすけてくれ！ 俺たちの村が、村がああ！』

『落ちついてください。どうしたんですか？』

『俺は隣村のセルニエスから来た……はあはあ！ セルニエスがデスフロッグに襲われた！』

『この時期に立て続けに襲撃が起こるなんて。それで、被害状況は？』

『全滅だ！ 村が全部、デスフロッグにのまれちゃった！』

『なんですって……！？ そんな馬鹿な！？』

これまでの平穏な日常は音を立てて崩れ去った。事態は急激に転換していく。

* * *

隣村から来たという玉兎の話によれば、現れたデスフロッグの数は100匹以上にのぼるといふ。この数は異常だった。これまでの半年に一回の襲撃では、多くても20匹程度しか現れていない。100匹もの大群で押し寄せた前例などなかった。

村の長老たちは集まって会議を行っている。隣村が制圧されてしまった。もはやデスフロッグたちがこの村へやってくることは時間の問題である。玉兎の戦士たちは戦いの準備を始めた。ロバートとジョージは戦士として戦うようだ。

『ヨウリはモニカと安全な場所にて。デスフロッグは僕たちが食い止めるから』

『いやいや、それには及ばないさ』

『ヨウリ?』

俺も一角の妖怪。外で戦があつていふというのに、穴倉の中でぬくぬくと守られている気はない。

『だめだ！ 本当に危険なんだよ!?!』

『お前は俺の強さを知ってるだろ？俺はデスフロッグなんぞに負けはしない』

『で、でも……！父さんから何か言つてよ!』

ジョージは無言だ。じつと目を閉じている。寝てるのかと思つたら、おもむろに動きだした。家の奥から何かを持つてくる。その緑色の輝きを見て、俺の胸が高鳴る。

『あずかっていた物を返そう』

それは、俺の甲羅だった。いびつな流線形の形は整えられ、八二カム型六角形の直角的でメカメカしいデザインに。なんとなく原形は残っているが、甲羅はその姿を一新させていた。

『う、これは……』

俺は高鳴る鼓動を押さえて、甲羅を装着する。従来の甲羅は体を中心に腹側と背中側の甲羅が巻きつくような構造になっていた。それが、重心をほとんど背中側に移し、タンクを背負っているような感覚に変わっている。腹側の側面部分は俺のボディラインに沿うようにすっきりと細くなり脚を出す二つの穴も距離が調節され、ガニ股になることもなくなった。そして、一番変わった点は腹側パーツの構造だ。なんと背中側のパーツのスペースにスライドして収納できるようになっていた。装着するときはパーツを引き出し、さらにそこから観音開きのように蓋が開き、その間に体を収めるようにして着る。これはもはや甲羅ではない。ジョージの言つとおり、“アーミー鎧”だった。

『す、すげえ……』

『いい物を見せてもらった。感謝している。気に入ってもらえたか?』

『すげええええ!! うおおおおお!!』

『よ、ヨウリ!? なんで泣いてるの!? 落ちついて!』

俺はうれし泣きした。まさかここまでの作品を仕上げてくれるとは。感無量だった。確かにまだなんか変ではある。しかし、それでもこれは進化とっていい進歩だ。あのダサイ甲羅がギリギリかっこいいと言えるまでの変化をとげた。これは奇跡だ。

『おおおおお！ これなら負ける気がしねえ！ デスフログなんて100匹まとめてボコボコにしてやんよ！』

俺のリミットは最高潮に達していた。

「18話」と、思ったけどダメでした」

『ヨウリ、村の外から来たお前を、この村の戦いに巻き込んでしまったことは申し訳ないと思っている』

『気にすんな。一食一飯の恩義ってやつだ』

ジョージはいつにもまして辛気臭そうな顔をしている。

『これは饞別だ』

渡された物は短剣だった。ナイフと言うには少し刃渡りが長く、剣と言うには短い。鞘から抜くと、刀身は漆黒色に鈍く光っていた。

『地下深くで採れたルナタイトを使った。手入れをせずとも、錆びず、刃こぼれはしない』

剣なんて使ったことがないが、もらえるものはありがたくもらっておこう。俺は腰のベルトに短剣の鞘を通してさげる。

『あー！ 父さんずるい！ ほ、僕もあとで何か贈るからね！』

『まあ、ロバートったらヤキモチ焼いちゃって』

ロバートとモニカが何か言っている。なにかにつけて、ロバートは父親に対抗意識を燃やしているな。めんどくさい奴だ。

『長老からの通達だ！ 村の者は全員、穴の外に集まれ！』

遠くでだれかが叫んでいた。集会でもやるのだろうか。俺たちも他の玉兎のたちの流れに乗って、穴の外へと出てきた。そして、全員が集まったことを確認すると、年老いた玉兎が前に出て演説を始めた。

『皆の者、知つての通り、この村に我らが宿敵デスフロッグの群れが来襲しようとしている。これはこの村創始以来の未曾有の危機。そこで長老衆は決断をした。デスフロッグを罠にかける』

話を聞いていた玉兎たちは騒ぎ始める。デスフロッグの群れを押しとどめるような罠をいかにして仕掛けるのか。

『デスフロッグが村を襲わんとしたそのとき、『兎爆石』を起動させるのじゃ』

ざわめきは急速に大きくなっていった。絶望するかののような悲鳴を上げ始める者まで出始める。

『ロバート、『兎爆石』ってなんだ？』

『村の長老が代々封印している石だよ。そこには膨大なフォースが蓄えられており、封印を解いたが最後、地を覆すような爆発を起こすとか』

『それって、村がふつとばね？』

村を犠牲にする覚悟があるということか。石は村の地下深くに固定されており、持ち出すことはできない。敵が村に殺到したそのときを狙って、村ごと爆破し、一網打尽にするという計画のようだ。

デスフロッグは地下に潜って移動する。地下の住民をすべて避難させ、からっぽになった村にデスフロッグを誘導できればかなり有利に戦いを進められる。

しかし、当然反対する者が大勢いた。自分たちが住んでいた村がなくなってしまうのだ。それに、封印を解くためには長老が『兎爆石』の傍にいないといけないという。つまり、長老の命を犠牲にする作戦なのだ。

『静まれ、皆の者。100体ものデスフロッグの群れに、我らが抗う手段はもうこれしか残っておらん。おそらく、この罠が成功したとしても、すべてのデスフロッグを殺すことはできない。生き残った奴らは地上に這い出し、我らに牙をむくだろう。戦士たちは戦いに備えよ。必ず、勝つのだ！』

俺が全力を出せば、デスフロッグを100匹倒すことができるだろうか。それは可能だろう。しかし、地下から襲い来る敵から村を守りとおせるかと言えば、それはできそうにない。俺は地下の敵の相手ができるスキルなんて持っていないのだ。戦士たちを全員守りきることもできないだろう。俺がここで出しゃばったところで、長老を説得なんてできない。あれは覚悟を決めた顔だった。彼らにとって、デスフロッグとはそれだけの存在なのだ。

俺が妖怪だからだろうか、それとも玉兎ではないからだろうか。薄情だと思わなくもないが、声高に自分の主張を垂れ流す気もない。長老の決断は、最善手だ。

『やれやれ』

俺は肩をすくめた。

* * *

地下の穴倉から最低限必要な物資を外に運び出す。クレーター丘の上に長老を除く玉兔の全員が避難し終わった。いつデスフロッグが来てもおかしくない状況だ。悠長に穴の中で構えていることはできない。

『大変なことになっちゃったね』

『まーな』

ロバートは無理に明るい雰囲気を保とうとしているように見えた。いつものうざったさが無い。

『はいこれ、ヨウリにあげる』

ロバートは何か差し出してきた。さっきの約束を律儀に守ったのか、プレゼントのようである。それは帽子だった。ベレー帽に似ている。漫画家がかぶっているというより、軍人の物っぽい。

『なんだこれ？』

『それは戦いで耳を失くした戦士のための帽子なんだ。デスフロッグの毒にやられて切り落とさないといけなくなつた戦士はたくさんいる。そんな戦士は最前線で戦つた勇気をたたえられて、この帽子を贈られるんだ』

『そんな名誉ある帽子、恐れ多くてかぶれねえよ』

俺に似合いそうにないしな。でも、ロバートは俺にウサ耳がないことを気にかけて、この帽子をくれたのだろうか。変な気、遣いや

がって。

『ま、気が向いたらそのうちかぶる』

『そう』

ロバートは苦笑していた。俺は甲羅の中に帽子をしまっ。せっかの贈り物だ。大事にしないとな。

* * *

その日の夜、大きな地震が起こった。奴らが来たかと立ち上がったとき、さっき起こった地震がちっぽけに思えるほどの揺れが大地に広がった。そして、玉兎の巣穴があった場所に天を突くような白い炎が立ち上った。

19話「黒幕」

暗い空を染め上げる炎、それは妖力で形作られた幻だ。だが、その威力は本物である。『兎爆石』が起動したのだ。それはすなわち、デスフロッグの襲撃を意味する。

丘の上で、出撃の時を待つ玉兎の戦士たち。静まり返った戦場に、デスフロッグが現れた。ぼこぼこ土が盛り上がり、醜悪な力エルの姿を見せる。

『今だ！ かかれーっ！』

突撃の合図とともに、戦士たちが駆け出した。俺も一緒に走りだが、戦士たちの速いこと速いこと。ほとんどの戦士が『兎跳』を使っているのだ。俺はかなり出遅れてしまった。

『ガ、ガマアア……！』

地上に現れたデスフロッグは手負이었다。表皮が焼けただけ、苦しそうにうめいている。自慢の毒をまき散らす余裕さえないようだ。自爆作戦は成功していた。犠牲は無駄ではなかったのだ。

これは俺が手を出すまでもないんじゃないか。戦士たちは獅子奮迅のはたらきで次々に敵を屠っていく。と、そこで俺のすぐ横の土が盛り上がりを見せた。

『おっと』

顔を出す前に妖力弾を連射する。しばらく苦しそうにうごめいていたが、すぐにおとなしくなった。悪いね、同じ妖怪として多少は

心が痛むけど、妖怪の世界って強者が勝者だから。

敵はいないかと周囲を見渡すと、ロバートとジョージの姿が見えた。二人とも近くで戦っている。その傍へと向かった。

『ヨウリ！？ 問題はない！？』

『ないよー』

ロバートの実力でも、さすがに瀕死のデスフロッグには引けを取らなかった。的確に急所を狙って仕留めていく。

『……ふんっ！』

その横で、ジョージは無言で剣を振るっていた。剣先がかするようにデスフロッグの鼻先に当たる。はずしたのかと思いきや、ぱっくりとデスフロッグの頭が真ん中から二等分されていた。何をしたんだ？

『あれが達人の『兎狩』だよ。父さんは剣の扱いも一流だからね』

あれはやばいな。まるで不可視の刃だ。甲羅でなら防げるが、生身の部分に当たったら俺でも無事で済みそうにない。玉兎と俺との妖力は雲泥の差だっというのに、ここまでの脅威になるとは。玉兎三技。パネエ。

『なんだよ、玉兎も十分強いじゃん。デスフロッグとか余裕じゃね？』

『そうでもないよ。デスフロッグの毒は強力だからね、僕は近接戦闘を主体としているから毒に侵される危険が常に伴う。それに

奴らは地下を移動するから村を狙われないように色々考えないといけないし』

デスフロッグの毒は俺にとってさほど怖くない。これは妖力に起因する毒性である。デスフロッグよりも圧倒的に保有妖力が高い俺なら、体内で簡単に中和できる。だが、玉兔はそうはいかないのだろう。ちよつと触るだけでも呪いのように体を蝕んでいく。なるほど、確かに厄介だ。

『でも、今回の戦いは楽勝なんじゃないか？ もう地面から出てくる数も相当減つたみたいだし』

敵の勢いはもうほとんどなかった。妖力探知で地下を探ってみても、動きのある気配は……あれ？ なんだ、この馬鹿でかい妖力反応は？

そして、もこもこと盛り上がる地面。今までの規模とは比較にならない土が舞い上がり、紫色の巨大な物体が踊りだす。なんとそれはカエルの手だった。ということは、つまり……

『ジーザス』

戦士たちが後ろに下がる。飛び出したのは超ド級のデスフロッグだった。こんな話は聞いてませんが。

『な、なんでクイーンデスフロッグがここにいるんだ!?!』

ロバートの反応を見る限り、こいつはクイーン。つまり、デスフロッグの親玉ということか。まさかこんな隠し玉を持つてくるとは。体は傷だらけだが、どうにもピンピンしていらっしやる。

クイーンデスフロッグはガパリと口を開いた。その家一軒は丸こ

と飲み込めそうな口からピンクのぶにぶにした何かが飛び出す。それが逃げ遅れた戦士たちに襲いかかった。ペろんつとアイスクリームでも舐めるかのように地面を一舐め。それで付近の地表は一掃されていた。粘液にからめとられた戦士たちは声を上げる間もなく女王カエルの口に消えた。おいおい。

『そんなじゃ、俺は行ってくるぜ』

『あ、ヨウリ、待って！』

俺は妖力弾をぶつ放しながら女王カエルに突っ込んでいく。それに気づいた女王カエルがこちらに向けて口を開いた。敵は不用心にも自分の体内に“毒”を取り込むつもりらしい。

『さて、このスペシャルポイズンに、お前は耐えられるかな？』

俺は甲羅に引きこもった。頭と手足を引っ込めて、腹側パーツを収納すれば、綺麗な六角柱のかたちに変形する。いいねえ、イカしてるぜ！ その直後、俺は女王カエルの口の中へと導かれる。そして、食道を通って、胃に押し込まれた。

『さあ、シヨータイムだ！』

俺は弾幕を盛大にばらまいた。

* * *

クイーンデスフログはしぶとかった。10分くらいは俺の内部からの攻撃に耐えたのではなからうか。ぴよんぴよん飛び回って大変だったらしい。途中俺を吐きだそうと努力していたが、俺はしぶ

と奴の胃袋に居座り、胃粘膜をズタズタにしてやった。

ひっくり返ってびくびくしているカエルの口から帰還するとロバートが泣き顔で迎えてくれた。俺が食われて死んだと思っただらしい。ジョージは無言だったが、呆れ顔をしていた。

改めて、獲物を見る。その全長は50メートルはあるだろうか。お尻から巨大な卵がにゆるにゆる出てて、ドン引きした。あの寒天ゼリーみたいなやつね。これがデスフロッグの卵かと思うと鳥肌が立つ。そして、俺は今、女王カエルの仰向けになった白い腹の上を歩いていた。

『なんかおかしいと思っただよね』

その腹に突きささる鉄の塊を引っ張りだす。それは、特大の大砲の弾だった。こんな兵器を玉兎が使用したとは考えにくい。ということ、あと残された可能性は一つしかない。

『人間の仕業だ』

20話「重なる不運」

『クイーンデスフロッグを倒したぞー！』

『もう怯えながら暮らす必要はない！』

玉兎たちは女王カエルを倒したことで、浮かれ気分になっていた。何人かの戦士たちは女王カエルにやられてしまったが、むしろ、全滅せずにたった数名の犠牲だけでこの局面を乗り切ったことになる。俺は敵の親玉を倒した英雄に祭り上げられる始末だ。こいつらは能天気でいいよな、まったく。

『どうしたの、ヨウリ。そんな難しい顔して。みんな、あんなに喜んでるのに』

『ロバート、クイーンデスフロッグは今まで姿を現したことはなかったんだよな？』

『そうだよ。クイーンがすべてのデスフロッグの母なんだ。奴らの巣穴の最奥にいて、外に出てくることはない。デスフロッグたちが守っている。だからこそ、こうして倒せたことが奇跡なんだ』

『じゃあ、そんな大事な女王様がどうして無防備にこのこ出てきたか、気にならないか？』

『まあ、それは気になるけど……何か巣穴から出なくちゃならぬい事情があったんじゃない？』

『それだ。つまり、女王カエルは何らかの危機的状況に陥って、危険を冒してでも巢穴の外に出ないといけない事情があった。そして、俺はその事情について、予想がついている』

『え！？ どういうこと？』

『犯人は人間だ』

『ニンゲン？ って、確か、前にヨウリが言ってたアースの種族だよな。うーん、信じられないけどなあ』

ロバートはいかにも眉唾といった表情をする。自分の目で見た物でなければ納得できないのだろう。俺がこいつらの立場なら、それもうなずける。いきなり、天国からやってきた使者が敵の親玉を攻撃しました、と言われても、ハア？ としか答えようがない。

『……だが、ヨウリの意見は無視できるものじゃない』

『父さん？』

そこにジョージがやってきた。手にはクイーンデスフロッグの腹に埋まっていた砲弾の一つを持っている。『金属を加工する程度の能力』を持つジョージに見せれば、これがどういう物が理解してくれるのではないかと思って渡しておいたのだ。

『この金属の塊は、玉兎ではとうてい持ちえない技術で作られている。複雑すぎて俺にも再現できそうにない。ましてや他の村の間がこれを作ったとは考えにくい』

『父さんはニンゲンって奴らがいるって、信じてるの？』

『樂觀視はできないだろう。それに、ヨウリはこんな嘘はつかない』

『ぼ、僕だってヨウリのことは信じてるさ！なるほど、ニンゲンね……』

今はこの程度の理解でもしかたないか。俺たちはいつか人間と遭遇するときがくるだろう。そのとき、どういう行動を取るべきか、あらかじめ計画しておく必要があるな。

『ヨウリちゃんーん！』

『ぶほっ！』

『お姉ちゃん心配したんだからね〜！』

モニカが胸で俺を窒息させにかかってきた。まあ、ここ宇宙空間だけ。真剣に考えようとするとこれだからな。変な気負いがないことは、いいことなのかもしれないが。

* * *

村を失くした俺たちは、集まって移動を始めた。元の巣穴は木端微塵に吹き飛び、デスフロッグの死体からあふれる毒で使い物にならない。他の村に移住するしか生き延びる手はない。これだけの数の玉兎を、一つの村に全員が収まるキャパシティはないはずだ。だが、それでも行くしかない。

しかし、玉兎たちに暗い感情は少なかった。クイーンデスフロッグを倒したという事実はそれだけ彼らの希望になっているのだ。俺

たちの一団はくぼんだ灰色の地面が連なる月面をひたすら歩いて進んだ。

そして、デスフロッグの襲撃から五日が経ったその日暮れ、俺たちは目的地へと到着した。

『な、なんだあれは……！』

玉兎たちは一様に目前の光景に見入っている。そこには銀色の塔が経っていた。サーチライトが辺りを照らし、異様な雰囲気にかまれている。その塔が経っている場所は、俺たちが目指してきた玉兎の村の真上だった。

こんなことができる連中なんて人間だけだ。その要塞のようなものしい警戒の様子から見ても、とても友好的に話ができるようには思えない。おそらく、地下の玉兎たちの村はすでに制圧されていると考えた方がいい。これはやばいことになってきた。

『とにかく行ってみよう！』

待て待て。なんでお前らはそんなに考えなしに首をつっこもうとするんだ。自分たち以外の文明との接触がなかった影響だろうか。こいつらの警戒心は薄すぎる。俺が制止する間もなく、玉兎たちは銀の塔に向かって駆け出していく。

『やめろ！ とまれ！』

見つかるのは思いのほか早かった。結構な距離はとっていたと思っただが、サーチライトがこちらに集まってくる。玉兎たちはその光を見て何を勘違いしたのかはしゃぎだす有様だ。

そして、塔から何かがやってきた。それは装甲車だった。どう考えても手加減なしだ。攻撃は唐突なものだった。塔から光の線のよ

うな物が放たれる。ライトかと思いきや、それに当たった玉兎は肉を焼かれて苦しんだ。ビーム兵器だ。その光の線は容赦なく雨のように浴びせられる。相手が仕掛けてきたことを知ったときにはもう遅い。何人もの玉兎たちがやられていた。

『ちっ！ えげつねえことしやがる！』

遠距離からの一斉放射にこちらはなすすべがない。いかに俊足で走る玉兎の戦士たちといえども、光り速さで襲い来るビームの槍には敵わなかった。俺は甲羅にもぐってガードし、近くにいたロバート一家の盾になった。俺の甲羅は三人も隠れられるほど大きくない、というか一人でもいっばいっばいだが、穴を掘ってなんとかした。これは早急に撤退するしかない。とにかくビームから狙われない位置まで離れないと全滅してしまう。

しかし、玉兎たちは未知の驚異的な攻撃を前に恐慌状態に陥っていた。

『……仲間を助けに行く』

この一方的な銃撃戦に、無謀にもジョージは身を投じようとしていた。ロバートとモニカが必死で止める。

『今、外に出たら八チの巢だぜ？』

『そうだよ、父さん、無茶だ！』

『いくらお父さんでも、あんな攻撃、どうにもできないわ！』

だが、ジョージはそれでも止まらなかった。後のことは任せたと一言だけ残し、別れの言葉もなく俺の甲羅の陰から飛び出していく。

俺はこの場から動けないので、加勢に行くこともできないしなあ。どうすりゃいんだ、この状況。ビームさえなんとかできればまだ手はあるんだが。

だが、その悩みは意外にもあっけなく解決した。レーザーの猛攻が突然、止んだのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5878z/>

東方 亀兎忍

2011年12月21日00時58分発行